
兄を勇者にする方法

音無遊亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄を勇者にする方法

【Nコード】

N9272P

【作者名】

音無遊亜

【あらすじ】

仮面優等生で引き籠りな兄、行人。健気で兄想いな妹、佐奈。ふたりは何の前触れもなくいきなり異世界に勇者として召喚されてしまう。

兄「嫌だ！！誰が勇者になんてなってやるか！！」

妹「兄さん、いい機会じゃありませんか。」

勇者らしくない勇者兄妹の織り成す笑いあり、鬱あり、ネガティブあり、微エロありの超ドタバタ引き籠りファンタジー

兄、召喚

「そうか、この世界が間違ってるのか！！そうか、そうなんだな！！」

大都会。人々が夢を求めやってくる場所。そんな都会のど真ん中のアパートの一室で行人は叫んでいた。

「まったく、朝から何を叫んでいるんです？」

妹の佐奈はあきれ顔で行人に問う。

「考えてもみるんだ佐奈。この世の中は人を裏切り欺いたものほど勝者となっていく。こんな世の中間違っている！！」

行人は拳を振るしつつ佐奈に向かって力説を振るう。

「で、結局は何が言いたいんですか？」

あきれ顔のまま佐奈は行人に問う。

「こんな世の中を変えるために何か行動をしなくちゃならない！！俺は…俺はそう思うんだ！！」

行人はつすぐな視線で佐奈を見つめる。

「建前は結構。それで本音は？」

「あ、もうぶっちゃけ生きるのとてもなく面倒だしこつから先嫌なことばかりになっていくだろうからいつそのこと死んじゃおっかな？なんて思ったりしたのさ。…しまった！！」

「はぁ…」

佐奈のため息がアパートの一室に響く。

大川行人。職業、学生。勉学、運動、芸術と全てに秀でる天才。顔も美形で人当たりも良くクラスメイトからの人望もある。いわばクラスの人気者である。

しかしそれは世をしのぶ仮の姿。彼の正体は実は…

自堕落、無気力、自暴自棄。あえて言っておこう、ただのダメ人間である。

大川佐奈。職業、学生。兄想いで、優しく思いやりのある少女。落ち着いた物腰と兄と同じく整った顔立ちから学園のアイドルとして人気を得ている。

「ホラ、学校に行きますよ。兄さん。」

「嫌だ、絶対に嫌だ!!」

意地でも連れて行こうとする佐奈に対し行人は布団から動こうとしない。

「何がそんなに嫌なんですか？」

「す、全てだ!!人の目が怖い、人と会話するのが怖い、人に会うのが怖い、人が怖い!!」

行人は学校どころか生存すら満足に出来ない様なしょうもない理由を掲げ布団の中に籠る。

「兄さん、対人恐怖症もいいところですよ。」

佐奈は行人を布団からひきはがし腰に手を当てる。

「な、何をするんだ佐奈!？」

「学校に行こうって言うてるんです。」

「だ、だから嫌だと…」

「お・に・い・さ・ま?」

佐奈は満面の笑みを浮かべながら行人を見つめる。

「はい解りました行きます私が間違っていました謝ります土下座します学校に行きます真面目に生活してみようとんでもないほど後

る向きにですが検討してみようと思いますだからその手にある万能文化包丁1870円を下ろしてくださいお願いします。」

行人は観念してとりあえず目の前の佐奈に土下座をして命乞いをする。自殺はしたいが痛いのは嫌だ。それが行人のモットーだ。

通路路。学生がいちゃいちゃしつつ登校したり愛をはぐくんだりそれを妬んだりする場所。しかし大川兄妹にとってはスイッチを入れ替える場所である。

「大丈夫ですか、兄さん？」

「ああ、問題ない。いつもすまないな。迷惑掛けてしまつて。」
先程の体たらくは何処へやら、行人は完全に優等生モードに入っていた。

「本当はいつもそうであつて欲しいんですけどね。」

佐奈はあきれ顔で行人の3歩後ろをついていく。

「と言つてもな、佐奈。常にこうしてはストレスがたまつてしまつ。」

行人は姿勢をただし佐奈の方を見る。あの体たらくさえなければ自慢の兄なのだと佐奈はいつも思う。

そうしていつものように校門の前につきいつものように別れを告げそれぞれの教室え向かうとしたその時…

周囲に強烈な光が差し込み二人を包み込む。

「キャアアアッ！！」

「佐奈ッ！！」

行人は佐奈に覆いかぶさるようにしてふたりは光に包まれた。

そして、ふたりが目を開けた瞬間に周囲に広がっていた光景は…

「草原？」

「みたい……ですね……」

行人と佐奈は大草原の中にいた。しかし二人にはすぐにここが自分たちのいた日常でないことが分かった。

「さ、佐奈……アレは何だろうな？」

「わわわわ私に聞かないでくださいよ。」

ふたりの目の前にいるのはゲル状の体に間抜けな目を持ちうようにしている小型の生物。RPGなどでおなじみ、勇者たちに初期からずっと経験知稼ぎという名目上ボロクソにやられ続ける哀れな存在。そう、スライムだ。

「分かったぞ、佐奈。」

「ななな何ですか兄さん？」

ふたりはスライムと目があつたまま会話を続ける。

「これは夢だ。」

「そろそろそうですね。これが現実だなんてあり得るわけがないですね。」

「あははははははははははははははははは」

ふたりはスライムと目があつたままどちからともなく笑いはじめる。

「夢なら刺激を与えれば醒めるはずだ。佐奈、試しにちよつと殴ってみてくれ。」

「わかりました。行きますよ……せーのっ!!」

鈍い音にスライムがビクンと跳ねる。佐奈の手には行人の返り血がついている。

「どうです兄さん？」

期待に目を輝かせながら佐奈は行人に聞く。

「佐奈、一つ分かった事がある。」

「な、なんです？」

口元の血を拭いっつ行人はスライムから目をそむけ佐奈の方を見る。ここまでの激痛を伴ってもいまだに醒めることがない。ということはずなわち…

「これは…現実だ…」

草原に風が吹いた。

兄、戦闘

RPG史上最弱の生命体、スライム。行人と佐奈の目の前でそれはただじつと二人を見つめていた。

「に、兄さん。これは倒すべき…なんですよね？」

佐奈はスライムと目を合わせたまま行人に話しかける。

「ああ、そうだろうな。襲ってくる可能性もあるし、倒すべきなのだろう…」

行人もスライムから視線を放さないで佐奈に答える。

「やるしかありませんね。」

そう言って佐奈はスライムに向かって文房具有数の鋭利さを持つ円を描く道具、コンパスをとりだした。

「ささ、兄さんも何かしら構えてください。」

佐奈は行人にそう促す。しかし行人は返事すらせず小刻みに震えている。

「どうしたんですか？」

佐奈はコンパスをすぐさま投げられる体制のまま行人に問いかける。行人は少しの間をおいた後ボソツと呟いた。

「俺には…む、無理だ…」

行人の口から出たのはまさかの戦えない宣言だった。

「は、何を言ってるんですか？無理って…いったい何が無理なんです？」

佐奈は牽制のためにスライムに向けて投げるモーションを見せながら行人に問いかける。無理だと宣言した兄とは対照的にこの妹、殺る気満々である。

「お、俺には…スライム…いや、スライムさんを殺すことは…殺

すなんてこと…とてもじゃないが出来ない…!!」

行人は佐奈に向かって悲痛な訴えでもするかのように答えた。

「す、スライムさんってまさか…兄さん…」

佐奈は少しの間をおいてこう言い放った。

「スライムに情が移ったなんて言いませんよね？」

しばしの静寂。そして行人は重い口を開いた。

「まったくもって…その通りだ…」

草原にまた風が吹きわたった。

要は行人はスライムに情が移って攻撃が出来なくなったのである。

「兄さん、貴方って人はどこまでアホなんですか？」

佐奈はいままでとは比べようのないほどの呆れでもって行人に問いかける。

「だ、だって良く考えてみてくれ!! 本来なら倒されなくて、殺されなくていいはずなのに経験値を稼ぎたいという身勝手な都合で殺され続けレベルが上がれば一撃で切り捨てられる。そんな、そんな事があるっていいと思うのか!？」

行人は目にうつすらと涙を浮かべながら佐奈に力説を振るう。

「や、本来そういう目的のためにスライムは生まれたんですから。」

倒されてしかるべき存在なんですよ。」

佐奈は諭すように行人に話しかける。

「そんなものロトが作った法則だ!!」

行人はキツと睨むように佐奈を見る。

「ここでそんな伝説の大勇者の名前をあげないでくださいよ…」

佐奈は片手で頭を押さえながら行人に言う。

「いいぜ…ロトが倒さなくちゃならない存在だって決めたのなら…まずはそのくだらない幻想をぶち壊す!!」

「や、兄さん今カッコいい事言っただけな顔してますけどそれ完全にパクリですから。兄さんの手に幻想殺なんて能力備わってないですから。」

「と、とにかく!!俺にはあんな弱い存在を無下に殺すことは出来ない!!」

行人は強い意志を瞳に宿して佐奈に向かって叫ぶ。

「そういうオーラをもっと大事なところで発揮しようよ…兄さんがやらないなら私一人でも…」

そう言っただけで佐奈はコンパスをスライムに向けて投げようとする。

すると行人があわててそれを阻止する。

「兄さん、今度は何なんです？」

佐奈は若干苛立ったように行人に聞く。

「佐奈よ、こうは考えられないだろうか？」

「どう考えるんですか？」

佐奈は嫌な予感しかしないながらも行くことに続きを促す。

「きつとあのスライムさんは仲間になりたそうにこちらを見ているんじゃないだろうか。」

行人の口から出たのは懐かしい台詞だった。

「と、いいいますと？」

佐奈は思っていたよりましな返事が返ってきたので拍子抜けした。
「ああ、先程からあのスライムさんは何度も攻撃のチャンスがあったにもかかわらず一切攻撃してこなかった。ということはつまりス

ライムさんには戦う意思がないんじゃないのか？」

そう、確かに先程からこの見つめあった状態でかれこれ15分ほど経過している。

「た、確かにそう言えるかもしれないですね…」

佐奈は今改めて行人の凄さを思い知らされたような気がした。そう、行人はやるときはやる自慢の兄なのだ！！

「ホラおいで。スライムさん。怖くないよ。」

あくまで紳士的に行人はスライムを抱きかかえようとする。すると…

ベシッ！！

鈍い音を立て行人は吹き飛ばされた。

「どうやら、あのスライムさんはやんちゃなようだ。」

「やっぱり世の中甘くないですね、兄さん。」

「ああ、そうだな…」

兄、出合

「さて…スライムさんはやんちゃだが仲間になる気はあるようだ。」
行人は殴られたほを抑えながら佐奈に向かって明るく話す。

「兄さん、そのポジティブさを現実で活かしましょうよ…」

佐奈は額を抑えて行人に応える。

先程行人を殴ってからスライムは再び二人を見つめるだけだった。

「しかし困った…文房具以外こちらは丸腰だ。初期装備と言えど勇者は何かしらの武器、皮の服程度は身につけている。それでやっと普通に戦える相手に丸腰で勝てるだろうか…」

行人の疑問はまっとうである。いくらスライムとはいえど村人程度のキャラクターは倒せないのである。

「ですが兄さん、スライムですよ？何も知らない初心者時の冒険者が戦うコマンドだけで倒せるスライムですよ？」

佐奈は当然の如く異論を唱える。

「いや、スライムさんは十分に強い。本来ならゲル状の物体が生命を持っているのだから窒息なり締め付けなり戦い方はあるのだろう。しかしそれは全て口トをはじめとするあまたの勇者たちの前での利用を禁止された。何故だと思う、佐奈？」

行人は佐奈に答えを求める様に問いかける。

「いいえ、まったくもって兄さんが何を言いたいのか理解できません。」

佐奈の答えに満足したのか行人は嬉しそうに口を開く。

「じゃあ、何故そんな勇者たちがいとまたやすく倒せるスライムさんを村人は倒せないんだと思う？」

佐奈は頭の中で思案を巡らせ一つの答えにたどり着く。

「勇者相手の時とは違う戦い方をしているからですか？」

「ご明察。つまりスライムさんは勇者の前では本来持っている力を

発揮させてもらえないがそれ以外では存分に強さを発揮しているんじゃないか？」

行人は探偵よろしく一つ一つ佐奈の疑問を解いていく。佐奈もRPGという既存の概念を持ち合わせているため行人の説明に感心し納得した。

「そ、そうかもしれません…」

佐奈は驚きそれしか口に出来なかった。

「じゃあこう考えてみよう。俺たちはこの場合勇者か否か。」

「勇者じゃ… ないです。」

そして行人と佐奈はついに結論へとたどり着く。

「そう、俺たちは勇者ではない。ならばスライムさんは思いきり力を発揮してくる。そんなスライムさんの本気を初期の勇者よりも軽装備な俺たちが倒せると思うか？」

しばしの静寂の後佐奈が恐る恐る口を開く。

「じゃ、じゃあどのくらい強いのかコレ投げてたしかめてみますね。」

佐奈は自分の持ち合わせる最強の武器。カバーをかけないで放置していると筆箱を貫通してしまうほどの鋭利さを持つ文房具、コンパスを構える。

「ああ、やってみてくれ。俺もスライムさんの能力を把握したい。」

行人の返事に佐奈は頷きコンパスを振りかぶる。

「ま、待て。佐奈。」

「ふえ…？どうしたんです？」

不意を突かれた佐奈は表紙の抜けた返事をする。

「いや、兄としては誰も見ていなくてもこんな大っぴらなところで

愛する妹にパンツを晒してほしくないわけだな。ジャージでなら許可しよう。しかしよく考えるんだ。お前はいまスカートだ。よつて兄としてはピッチングフォームをとることを許可できん。」

行人は真剣に……最早兄というより父親のような事を言う。

「わかりました。兄さんがそこまで言うのなら控え目に投げます。でもね、兄さん。」

佐奈は渋々納得したが何か付け足そうとする。

「なんだ？」

少しの間において佐奈は照れくさそうに顔を赤らめながら呟く。

「兄さんがどうしてもっていうのであれば……は、裸も見せてあげていいんですよ?」

その瞬間行人は全身にフリーズした。

言い忘れていたが大川佐奈は他に類をみないほど重度のブラコンである。

「わかった、まず精神科に行こう。その次に脳外科だ。大丈夫、俺に任せておけ。世界最高の医師の力を借りてお前の頭を直してやるからな。」

行人は妹の将来を心の底から不安に思った。果たして佐奈は無事に結婚できるのだろうか……行人は死ぬ前にやらなくてはいけない事を発見した。

「別に頭は問題ないですよ。それじゃあ投げますね。」

佐奈は何もなかったかのようにコンパスをスライムめがけて一直線に投げ込む。

ビュオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

轟音とともにコンパスがスライムに飛んでいき…

ボヨン

スライムにはじかれた。

「兄さん、分かったことが一つあります。」

佐奈はスライムを見つめたまま行人に呟く。

「どうした？佐奈…」

行人も決してスライムから目をそらさずに返す。

「スライムさんものすごい強いです。」

「ああ、そうだな。逃げるか？」

「それが得策ですね。」

ふたりは呼吸を合わせて一気にスライムとは逆方向に走り出す。

しかしスライムも瞬時にそれを追いかけてくる。

「スライムさん速っ！！」

「あ、あの速さ反則ですよ！！勇者以外の相手にどんだけ強いんですか！！？」

スライムはふたりの背後をぴつたりとマークする。

「きゃ…！」

「佐奈！？」

佐奈が足を滑らせ倒れてしまう。そこにスライムが飛びかかるうとした瞬間

『走れっ！！閃光の刃よ！！』

少女の声とともに一筋の光がスライムに降り注いだ。

「ピ、ピギー!!」

スライムは光をもろに食らいその場に倒れた。

「大丈夫か、佐奈!？」

行人は我に返ったように佐奈のもとへと駆け寄る。

「大丈夫です。それよりさっきの光は？」

「だ、大丈夫ですか!？」

一人の少女が少し離れた所から走ってきた。

白いローブに櫛の杖。フードに覆われたあどけない顔。典型的な白魔術師を彷彿とさせるような少女だった。

「貴女は？」

佐奈が立ち上がって少女に問いかける。

「私は、マリイと言って村の教会でシスターをしているものです。

お二人は見ない格好ですがどちらの方ですか？」

マリイと名乗った少女はふたりに聞き返す。

「ああ、俺たちは旅をしているんだ。俺は行人、こっちは佐奈。」

こつという時の行人の頭の回転は速く、佐奈はいつも感心させられる。

「イクトさんにサナさんですか。よろしく願いします。」

マリイは深々と頭を下げる。つられて佐奈も深々と頭を下げる。

行人はスライムの亡骸を天に見送ろうと振り返り…固まった…

「お、おい…佐奈…」

「どうしたんです？兄さん。」

「スライムさんが…」

「スライムさんならさっきマリイさんが倒したじゃないですか。」

佐奈は行人が何に驚いたのか気にもせずに返す。

「違う、スライムさんが…」

「スライムさんがどうしたんですか？」

佐奈はあきれたように行人に問う。

すると少しの間を置いて行人がスライムを指さして呟く。

「スライムさんがものすごく怒っているように見えるのは俺だけだろうか？」

行人の指さした先には…

先程までと比べられないような険しい表情のままこちらを見つめるスライムだった。

兄、決着

行人の指さす先には険しい表情のスライムが三人を見つめていた。「あのスライムさんの表情はやはり怒っているのではないだろうか？ いや、確実に怒っているだろう。」

「そうですね…怒り狂っているように見えなくも…ないですね。」
行人と佐奈はスライムを凝視したまま会話をする。

「まずいですね…スライムは怒るとより好戦的になります…」
ふたりの後ろでマリイがそんな事を言う。

「さて、改めて問うが…逃げるか？」

「そうですね、そうしましょう。」

「それがベストですね。」

三人の意見は見事に一致していた。

「じゃあ、せーので一気に走るぞ。」

行人の提案にふたりは頷き少しずつスライムから遠ざかっていく。
スライムから目をそらさないように。

「せーのっ！！」

行人の合図で三人が一気に振り返り全員で走り出す。するとスライムそ追いかける様に距離を詰めてくる。

「だから、反則だろあの速さ！？」

「ままままずいですよ兄さん！！距離が少しずつ迫ってきてます！！」

「スライムってあんなに速い生き物なんですか！？」

「スライムじゃない、スライムさんだ！！」

「あ、そうだ！！マリイさん、さっきの魔法をもう一度使ってくださいー！！」

「むむむむりですよー！！私は回復術を主に学んできて攻撃魔法は一日一回程度しか使えないんですー！！」

「じゃあ、最初の時点でしたっけ倒し切ってくださいよー！！」

「あ、アレでも全力でやっただんですよー！！」

「アンタも、村人クラスってことか。」

「むむむ村人は始まりの村から出ちゃいけないっていう暗黙の了解を忘れてしまったんですか！？」

「村人じゃないです！！シスターですよー！！そ、それに始まりの村ってどこですか！？」

佐奈とマリイがやんややんやと叫びながら三人は走り続ける。

「あわわわわ！！兄さん！！距離がもうあまりありません！！」

「iiiiiiiiイクトさん！！」

行人はやけに冷静な声で二人に話しかける。

「落ち着け二人とも。それと、マリイと言ったか…スライムさんは分断しても生きていられるのか？」

「い、いえ…心臓はひとつですので分断すれば生きることとはできません。」

「そうか…それは好都合だ。」

行人はマリイの応えに満足そうにうなずいた。しかしすぐさま頭を抱えて

「いや、待て…出来るのか？俺に…無理だ…やっぱり無理だ…！」

「？どうしたんです？兄さん。」

不安そうに行人を見つめる佐奈。息も上がっていて体力的に限界が近そうであるがそれでもなお気丈に振る舞い行人を気遣っている。

「チッ…やるしかないよな…！！」

そして後ろを振り返りスライムと対峙する。

「兄さん！？」

「イクトさん！？」

行人は鞆をおもむろに釣り両手にあるものを持つ。

「ま、まさか…兄さん…」

行人は二人に背を向けたまま不敵に笑う。

「どうしてもやらなくちゃならない時が俺にだってあるんだ、申し訳ないがスライムさん…経験値を稼がせてもらおうよ。」

「し、正気ですか兄さん！？相手はあの…あのスライムさんなんですよ！？」

「そ、そうですよイクトさん！！村の腕自慢たちも誰ひとりとして倒すことの出来なかったスライムさんなんですよ！？」

ふたりの反論を耳に行人は文房具最強の呼び声の高い、凶器として使用されることもある二枚刃と一枚刃の文房具。鋏とカッターをそれぞれ逆手に持った。

「それはそうだ。あんな生易しい方法じゃスライムさんには傷一つつけられないだろう。」

行人は二人に話し始める。

「さつき佐奈が投げたコンパス。角度78度、速度は50〜60km/hと言ったところか。当たり所も悪くなかった。だがスライムさんにはじかれた。何故だと思う？」

佐奈とマリイは首をかしげる。

「理由は簡単。投擲だったからだ。」

「ど、どういことですか？」

佐奈は理解できない様子で行人に問いかける。

「要は押し切る力が足りなかったんだ。衝撃を吸収してしまえば投擲は力を一切持たない凶器だ。おそらくスライムさんにダメージをすべて吸収緩和されてしまったのだろう。」

「そ、そんな…」

佐奈が驚きの声を漏らすなか今度はマリイが疑問を上げる。

「じゃあ、村の人たちはなぜ倒せなかったんですか？ちゃんと剣を持っていたのに…それに私の魔法だってそこそこ威力はあるはずなんですよ？」

「二刀で挑んだやつはいたか？」

「え？」

「さっきも言った通りスライムさんには衝撃を緩和吸収する能力がある。しかしそれだけでコンパスのダメージを完全になくすことは出来ない。ということはどういうことか？」

行人が問い返すと佐奈が口を開く。

「回復…しているんですか？」

「正解。おそらく少しの傷はコンパスで出来たのだろう。でもそれをすぐに塞いでしまえる高い回復能力。その証拠にマリイの放った魔法の痕ももうのこっていないだろう？それが村人たちが倒せなかった理由。剣一本ではスライムさんの回復に追いつけなかったんだろう。次にさっきの魔法だが…」

行人は名探偵顔負けの推理を展開していく。先程までがウソのような凛々しい姿。

「あの魔法、属性は？」

「え、えっと光の刃に雷撃を合わせた雷系統の魔術です。」

「じゃあ、答えは単純明快。多分スライムさんは絶縁体に近いのだろう。」

絶縁体。単純に説明すると電気を通さない物質。

行人は証明終わりとでも言わんばかりに手を広げた。佐奈とマリ

イはぽかんと口をあけることしかできなかった。

「そして倒し方だが…回復させないようにまず鋏を突き刺す。そしてすぐさまカッターで傷口周辺から一気に切り裂く。俺の理論が正しければそれで倒せる。」

行人は自信満々に話す。

「倒せなかったら…？」

佐奈は恐る恐る問いかける。

「逃げ続けた時と結果は同じ。ゲームオーバーだ。大丈夫、俺を誰だと思ってるんだ？」

そう言っ行人はスライムのもとに駆け込む。自分の理論に絶対の自信があるのか一片の迷いも見せずに胴体に鋏を刺し込む。

「ピッ…ピギッ…!!」

スライムの表情が歪む。

「すまない、お前のことを…お前の死を…俺は一生忘れない…!!」

行人はそう言ってスライムの体をカッターで切り裂いた。

兄、勇者

「ピ…ピギイイイイイイ！！」

スライムが悲鳴を上げ少しずつ溶け始める。

「す、スライムさんが溶けてる？」

「ということは成功したのでしょうか？」

佐奈とマリイが顔を見合わせて疑問符を浮かべる。

「消えましたね…」

「ええ、そうですね…」

スライムの姿は完全に干上がった。

行人はスライムが蒸発して完全に消えてからもその場をまったく動かずにただその場に立ち尽くしていた。

「兄さん…？」

行人はまったくその場から顔を上げようとしなない。

「イクトさん？」

マリイの呼びかけにも行人は全く反応しない。一体どうしたというのだろうか。ふたりは少し不安になつて顔を突き合わせる。

「イクトさんは一体どうしたんでしょう？」

「多分兄さんは勝利に酔いしれているんですよ。」

「そ、そうですね。」

「あ、あれ…？小刻みに肩が震えてる？」

「き、きつと笑いをこらえてるんですよ。」

「そ、そうですね。」

そしてふたりは行人のアクションを待つことにした。

そして5分が経過したころだろうか。行人は二人に背中を向けたまま口を開いた。

「佐奈…マリイ…」

「はい、なんですか。兄さん？」

「なんでしよう、イクトさん？」

行人は振り返りこういった。

「勇者というのはここまで辛いジョブなのだろうか…？」

行人は目頭を押さえ鼻をすすりながら二人に言った。

「兄さん…まさか…」

佐奈は何かを悟ったかのように口を開く。

「スライムさんを倒してしまったことを心に病んでますか？」

「病むに決まっているだろう…！！俺がこの手で…この手でスライムさんの尊い命を奪ってしまったんだぞ…！！」

「い、イクトさん…」

マリイも行人と同じように顔を覆う。

「兄さん、私たちが生きるために必要な死だつてあるんですよ？そういう死を悼むのは決して悪くないと思うんですが、いちいち下を向いては失われた命が報われません。私たちはスライムさんの分まで…強く…たくましく生きていかなくてはならないんです。」

佐奈は自分含め全員に言い聞かせるように言った。

「さ、佐奈…」

「ね？兄さん。顔を上げてください？」

佐奈は優しい声音で行人に語りかける。

「ああ、分かった…」

行人は顔をごしごしと拭い、顔を上げた。少し目が赤いが表情は明るかった。

「俺はスライムさんの死を無駄にしないように生きて見せるぞ。」

「はい、それでこそ私の大好きな兄さんです。」

「あの、イクトさんにサナさん。これって…」

マリイの指さした先には少しべたつとした薬が落ちていた。

「こ…これは…」

「スライムさんの遺品だろうか…？」

「そう、かもしれないですね…」

「これは持つていくべき…なのだろうか…」

「どうなのでしょう？」

「スライムさんの死を忘れないという意味で持つて言った方がいいんじゃないでしょうか？」

三人は謎の薬を見つめながら会話を続ける。いや、薬と呼べるかもよくわからないべたつとした小ビンに入っている青い液体だ。そう、べたつとした小ビンに…

「佐奈、マリイ…俺はいま改めて痛感したよ…」

行人は一拍置いて口を開いた。

「こんなべたべたな薬をどうどうとポケットにしまい、戦闘に使用し、さらには商人に売ろうとする勇者は…本当にすごいな…」

二人は無言で首肯した。

「で、でも凄いですよイクトさん！！スライムさんを倒しちゃうなんて…！」

マリイは話を変える様に明るく切りだす。

「村に言い伝えがあるんです。『この世界に災厄が降りかかるとき、希望の光となる戦士が姿を現すだろう。』って。きっとお二人のこ

とですよ!!」

「「は?」」

ふたりは素つ頓狂な声を上げる。

「だってスライムさんを倒したんですよ!!お二人が希望の光となる戦士に違いないです!!」

「や、そんなことないですよ。」

佐奈がやんわりと否定するがマリイはすでに聞く耳を持っておらず目を輝かせながら続ける。

「お、お二人に合ってほしい人がいるんです!!ぜひ村までご同行願えますか?」

「まあ、草原に残されても困るし構わないですけど。」

「ありがとうございます!!」

「待ってくれ。」

行人が唐突に口を開く。

「は、はい。なんででしょう?」

マリイは行人に気圧されたように恐る恐る問う。

「誰がこのべたつとした葉を持って村まで行くんだ?」

草原にしばらくぶりの静寂が訪れた。

兄、到着

神聖かつ公平な競技、ジャンケンの末にマリイが薬を持っていくことになった。

村につくと佐奈は驚きの声を上げた。大きな広場に活気のある市場。おとぎ話でしか見たことのないような景観の良い村だ。

「兄さん、凄いですよ!!」

佐奈はあたりをくると見回し行人の方を振り返る。

「はいはい、はしゃぎ過ぎて転ぶなよ?」

「分かってますよ…きゃ…!」

ドンッ

佐奈が大柄な男とぶつかった。

「言わんこつちやない…」

行人が軽くため息をつく。

「氣いつける!!」

「す、すみません。」

「ああ?聞こえねえんだよ!!」

大柄な男は目を見開き佐奈を睨む。

「ちょ、ちよつと!!サナさんはしっかり謝ったじゃないですか!

!」

マリイが佐奈をかばうように割って入る。

「うるせえ!!」

男は拳を振り上げマリイに殴りかかろうとする。マリイは恐怖に目を閉じた。

しかしいつまでたっても衝撃が来ないのを不思議に思い恐る恐る目を開けると。

行人がめんどくさそうに男の拳を受け止めていた。

「まったく、俺は対人恐怖症なんだって…それなのにこんなに人からんでたら体力もたねえよ…」

行人はため息をつきながらも男の手を放そうとしない。

「チツ、舐めてんじやねえぞクソガキ!!」

男はもう一方の拳で行人を殴ろうとするがその拳は行人ではない誰かに止められた。

「まったく、帰りが遅いと思ったら…こんなところで何やってんだよ、マリイ?」

黒衣着流しに長い刀をまとった気だるそうな顔の青年が男の拳を受け止めながらマリイに話しかける。

「し、神父様!!」

神父と呼ばれた男はあくびをしてマリイの方を向く。

「何やらかしたか…はあとで聞くとして…」

「どうします?」

行人が面倒そうに神父に問いかける。

「さあな?お前に任せるよ。」

「面倒なことはしない主義なんだ。」

「同感だ。」

行人と神父はそれぞれつかんでいた男の手を離す。

「ホラ、もう行け。力の差ぐらいわかっただろ。」

神父が声音を変えて男に向かって言い放つ。

「チツ、覚えてろよ!!」

男は逃げるように走り去って行った。その瞬間外野の人々が歓声を上げて行人と神父をとり囲む。

「ありがとうございます。神父様!!」

「ん?俺なんかやったか?」

「神父様、うちのパンもってっておくれ!!」

「お、そいつは嬉しいな。」

神父は村人の感謝の声に応える。

「神父様!!」

マリイが駆け寄ってくる。

「どうしたんだよ？お前がああいうのに絡まれることなんて滅多にないだろ？」

「はい、すいません。」

「いや、謝らなくてもいいさ。」

「私のせいです。すいませんでした。」

佐奈も神父のもとによって生き深々と頭を下げる。

「別にいいって。細かいことは気にすんな。」

神父はバツが悪そうな顔をしながら答える。

「そういえば、見ない顔だな？」

神父は話を切り替える様に佐奈に問う。

「この御二方は書物に合った伝説の勇者ですよ!!」

マリイが興奮気味に語る。神父はいぶかしげな表情でマリイに問いかける。

「二人って…もう一人はどこだ？」

「え？何言ってるんですか神父様。ほらここに…って、アレ？イクトさんは？」

「そういえば兄さんの姿が見えませんか。」

三人があたりを見回して声を上げる。

「「「あ」「」」」

三人の視線の先には…

見ず知らずの大勢の人に囲まれたことによる極度の緊張のせいで意識を失ったと思われる行人の姿だった。

兄、説明

白を基調とした調度品の並ぶ建物の一室で行人は目を覚ました。目を開けると心配そうにのぞきこむ佐奈の姿があった。

「大丈夫ですか？ 兄さん。」

「ああ、問題ない。少し… 人にてられたただけだ…」

佐奈の問いかけに行人は応えるが、人にてられる… というのはなかなかないことだろう。そんな事を軽々とやってのけた行人は少し頭を押さえながら体を起こす。

「そういえばここはどこだ？」

行人は佐奈に問いかける。すると

「ここは村の教会。サーリア教会です。」

白い扉を開けてマリイが入ってくる。

「加減はどうですか？」

「ああ、悪くはないな。ところでここまで二人が運んでくれたのか？」

「運んだのは俺だ。」

マリイの背後に立っていた神父が言う。行人と同じくらいの背丈で黒い着物をまとった神父と呼ぶにはいささかおかしい風体の男。腰に長い刀がさしてある。

行人は先程人にてられたのがまだ抜けきっていないのかビクツと固まってから問いかける。

「あ、アンタは？」

「俺か？ 俺の名前は雪。一応ここの教会で懺悔聞いたりしてる神父だよ。」

男、雪は軽く名乗って近くの椅子に腰掛ける。

「それはその…悪かった。」

「いいっていいって。それより一つ聞きたいことがあるんだ。」

「？　なんですか？」

行人の代わりに佐奈が雪に問いかける。

「お前ら、どこから来た？この世界の人間じゃないだろ？」

少し声音を落として雪は二人に問う。

「え？どういことですか？神父様。」

マリイは会話についていけないのか頭にいくつかの疑問符を浮かべている。

「な、何言ってるんですか。」

佐奈は誤魔化すようにそう言った。

「別に隠す意味はないだろ。」

行人が佐奈を手で制し雪を見つめる。

「ああ、確かに目が覚めたらあの草原にいたし俺等がいたところにはスライムさんや魔法なんて概念は存在しなかった。マリイを騙すつもりはなかったんだ。ただ、気づいてないなら知らせなくてもいいと思ってな。」

「そ、それは別にいいんですが…」

マリイは納得してないのかずつと首をかしげている。

「そうか。まあ、大方予想通りか。」

雪は興味なさげに呟く。すると今度は行人から口を開く。

「何で気づいた？」

「単純だよ。この世界に学校はない。身なりからしてお前ら高校生くらいだろ？」

「存在しないなら何でアンタがそんなこと知ってる？」

「これまた単純だ。俺もその高校の出身なんだよ。向こうにいりゃあ高三かな？」

雪はあつさりと答えた。そしてめんどくさそうに口を開く。

「つまり俺もお前らとおんなじでこの世界に生を受けた存在じゃない。」

行人は額に手を当てて思考にはいる。

「さ、サナさん…神父様とイクトさんが何を話しているのかわかりますか？」

「いいえ、分らないです。ただ…」

「ただ？」

「ものすごく難しい話を二人でしているっていうのは分かります。」

「デスヨネー」

「それに…」

「それに？」

「何となく二人がものすごく知的に見えます。」

マリイと佐奈は完全に二人の会話のテンションについていけずにひそひそと話し始めていた。

「どういう現象が起きたらこんなことになるんだ？」

「単純に解り易く言えば次元移動。互いに本来干渉しあわない概念に飛ばされること。頭の回転が速いお前なら理解出来るだろ？」

「アウトラインはな。帰る方法はあるのか？」

雪は頭を掻き少し難しい表情をしながら答える。

「現状では…存在しないな。」

兄、大樹

「まあ、大方予想通りだな。」

雪の話にも行人はさほど動じることなくあっさりと返す。

「ほう、驚かないか。」

「単純だろ。帰る方法があればアンタはもうとっくに帰りついている。違うか？」

「ふむ、半分あたりで半分外れ…だな。」

雪は行人と机で向かい合って話している。対人恐怖症な行人に合わせてか、はたまた面倒なだけかは分からないが、雪は視線を行人に集中させずに話を進める。

一方、佐奈とマリィはというと…

「あ、サナさん見てください！！魚が安いですよ！！」

「そうですね。あ、お味噌も安いですね。」

「お、嬢ちゃんたち可愛いね！！サービスしちゃおっかな！！」

「「ありがとうございます！！」」「

雪と行人の会話についていくことを放棄し、市場に買い物に出てきていた。

「それにしても私、驚きましたよ。お二人がいじげんから来たなんて。」

マリイは少し大きめのバスケットを前にもつてのほほんと話し始める。異次元という言葉の意義を良く把握してないせいかどことなくぎこちない雰囲気醸し出している。

「私も急にあたりが光ったと思ったたらあんなところに来てて驚きましたよ。」

佐奈も難しい会話に頭を悩ませるよりずっと楽なのかのほほんと返す。

「でも不思議ですね。なんでそんな事になってしまったんでしょう？」

「そうですねえ…なんででしょう？」

二人は少し考え込み明るいい顔で見つめ合う。

「まあ、難しいことは兄さんたちに任せましょう!！」

「そうですね!！」

二人は考えることを放棄した。

「で、どうしてこんなことになったかはアンタ分かってるのか？」

行人は神妙な面持ちで雪に話しかける。白を基調とした教会において黒い着物の雪と制服の行人は異常なまでに目立っていた。

「一応は、な。まあ、こんなところで話すのもあれだ。外に出た方が分かりやすいし外で続きを話そうか。」

そう言って雪は大理石の椅子から腰を上げる。

「ん？ああ、わかった。」

行人も腰を上げて二人は教会の大きな扉を開けて外に出る。

「ふう、良い風だな。」

雪は大きく伸びをして息を吐く。

「で、さっきの話のつづき。いいか？」

「ああ、いいけど。」

雪は虚空を指さす。

「あそこに大樹があるの見えるか？」

雪がさしていたのは虚空ではなく終わりの見えないような大樹であつた。

「ああ、見えるな。にしてもでかいな……」

行人が驚きの声を上げる。うつそうと生い茂った葉がとても鮮やかな大樹。全ての景色と調和しているその樹はRPGにでてくる世界樹を連想させるようなものだった。

「あの樹はこの次元の全てのエネルギーの源となっている、いうなれば世界樹だ。」

「また、王道RPGチックな感じだな。」

「そう思っておいていいかもしれないな。話を続けるが、世界樹のエネルギー、マナが最近ほとんどなくなってきてしまっているんだ。」

「……
「どういうことだ？」」

「世界樹自体は衰えないはずなんだがどうやら何かがマナを独占しようとしているみたいだ。」

「何となく話はつかめているが俺たちがこっちに來たのと関係あるのか？」

行人は少し考え込むように目を閉じる。

「関係あるのはここからだ。世界樹は自らの消滅を危惧したのか異次元より世界樹を救うためのコマを召喚した。」

「……
「……」

雪が行人の方を振り返り自分と行人を指さす。

「俺とお前、そしてお前の妹。他にも多くのヤツがこの世界に召喚されているぞ。」

「そ、そうだったのか。なんかスケールのでかい話だな……」

「まあな。今のところ『勇者』のピースは召喚されていない。そして、もう世界樹には召喚するほどの強大なマナは残っていない。」

「ってことはまさか……」

「ただいま兄さん。あれ？どうしたの？」

「神父様もどうされたんです？」

「ちょうど良いのか悪いのか佐奈とマリイも帰ってきた。」

「ああ、そのまさかだよ。」

「「？」」

雪は行人を指さし口を開く。

「勇者のピースは行人と佐奈、お前らだ。」

白い鳩の群れが一斉に教会の屋根から飛び立った。

兄、拒絶

「いやだ！！絶対に嫌だ！！」

行人は頭を抱えて喚きはじめる。

「何でだよ、もしかしてお前はアレか？実はただのヘタレか？」

「ヘタレで何が悪い！！」

「いや、悪いことはないんだがな…」

「そもそも勇者というのは大体モンスターとか倒さなきゃならないだろ！？」

当然である。

「あ、まずそっからか…」

雪は大きく息を吐き行人を見据える。

「そっからに決まってる！！スライムさんを倒すのにもあんなに心が苦しんだのにメタルスライムさんやキングスライムさん。ホイミスライムさんにスライムナイトさんなんかが出てきたらどうするんだ！！俺は罪悪感から死んでしまう！！」

「お前相当スライム好きだな…」

「スライムじゃない！！スライムさんだ！！」

どっちも一緒である。

「まあ、別にスライムさんだろうがスライムだろうが別にどっちでも…」

「スライムさんだ！！」

こたわりが理解できない。行人は雪を強く睨みつけ目に涙を浮かべながら力説する。そもそも行人の脳内にはスライムしかないようである。

「とりあえずスライム以外の敵はどうするんだ？」

「抹殺する！！」

支離滅裂である。行人はとにかくスライムと名のつくモンスターにだけ心痛むようである。

「そうか、じゃあスライムにエンカウトしなければいい。それにスライムにエンカウトしてもマリイやお前の妹あたりが何とかしてくれんじゃないか？」

「あの、お言葉ですが神父様……」

マリイが申し訳なさそうに口をはさむ。

「ん？どうした。」

「及ばずながら私の魔法ではスライムさんと相性が悪くてほとんどダメージは与えられませんでした……」

「は？」

「あ、私も丸腰ですし武器はさっきスライムさんと戦ったときはまったく効きませんでした。」

佐奈も口をはさむ。

「……」

とうとう行人は黙り遠くの方へと目を向けた。

「マリイ……」

「は、はい……」

「お前には後日みっちり稽古をつけてやる。」

「ヒッ……！」

マリイが小さく悲鳴を上げる。

「じゃあ、スライム倒したのって……」

佐奈とマリイがそろって行人を指さす。

「はぁ……」

雪はひととき大きなため息をついた。

「おい、お前倒せたんだろ？スライム……」

雪は振り返って行人に問いかける。

「私が町長です。」

行人は無表情でそう返す。

「は、お前何言って…」

雪が少し首をかしげながら様子をつかがう。

「私が町長です。」

行人は無表情に、そして機械的にそう返す。

「おい、お前まさか…」

雪は若干あきれたように雪を見る。

「私が町長です。」

行人はあくまで無表情に、そして機械的に。死んだ魚のような目をしながらそう返す。声にも精気が無く、心なしか小刻みに震えているようにも見える。

雪はくるりと振り返り佐奈とマリイに向かってホールドアップをする。

「どうしたんですか？神父様…？」

「兄さんに何があつたんですか！？」

佐奈とマリイはそれぞれ不安そうに雪を見上げる。

「お前ら二人のどっちでもいい。その現実逃避してる自称町長を現実に戻してくれないか？」

雪はめんどくさそうに行人を指さし言い放つ。

「「へ？」」

「私が町長です。」

どうやらあまりの重圧から行人の頭のネジが何本か吹っ飛んでし

まっ
たよう
だ。

「「「はあ
…」」」

三人の重苦しいため息が晴れ渡る快晴のもと響く。

兄、混乱

「で、どうするんだ？コレ。」

雪が指をさした先には頭のネジが吹っ飛んだ行人がうつすら笑いを浮かべながら突っ立っていた。

「私が町長です。」

「あ、あの…ものすごく怖いんですけど…」
マリイが恐る恐る行人に話しかける。

「私が町長です。」

「あ、あのイクトさん…？」

「私が町長です。」

「あの…」

「私が町長です。」

「ヒッ!!」

マリイは目につつすらと涙を浮かべ雪に飛びつく。

マリイ、戦闘不能。

すると今度は佐奈が

「私がやります。兄さんへの対処法は全て心得ているつもりです。」
と言って行人に近寄って行った。

「兄さん」

「私が町長です。」

「にーいさん」

「私が町長です。」

「ふむ、なかなかこれは重傷ですね。」

「今のタイミングでわかる要素あったか？」

「いいえ、まったくわかりませんでした…」

雪とマリイが首をかしげる中佐奈は更に行人の近くへ寄った。

「はむっ…」

唐突に佐奈は行人の耳に甘噛みを始めた。

「なっ　な　な　な　な　な　な　な　な　何やってるんですか！？サナさん！！」
マリイは顔を真っ赤にしながら佐奈に言う。

「何って甘噛みですよ？」

「だだだだだだだから何でアマガミしてるんですかぁ！？」

「や、兄さんはいままでこれで必ず現実に帰ってきたので…はむっ
…」

佐奈が色っぽい表情で行人に甘噛みを繰り返す。しかしその効果も虚しく行人は

「私が町長です。」
と、繰り返すだけだった。

「むう…これでもダメですか…」
佐奈は口元に手を当てて考え込む。これまで何があっても甘噛みで回歸してきた行人が今回は戻ってこない。それは佐奈にとっても初めてのことはあるし、マリィと雪に至ってはただただ傍観するしかなかった。
「こちよこちよこちよ…」
ためしに佐奈が行人をくすぐってみても

「私が町長です。」
と、無機質に返すだけの行人。

「ふむ…」
佐奈は再び考え込む。

そして5分後…

「ああ、そっか。」

「なんか思いついたのか？」

雪があくびを噛み殺しながら佐奈に問う。

「はい、すっごく効果がありそうなことを考えつきました。」

そう言つて佐奈は行人の制服に手をかけワイシャツのボタンをはずしていく。

「へ？サナさん？何しようとしてるんですか？」

マリイの問いかけに佐奈は素知らぬ顔で返す。

「や、今から兄さんのはじめてを私が奪つてあげようかと……」

全ての空気が凍りついた。

「何言ってるんですか!？」

「や、分かり易く言いますと兄さんのどうt……」

「言わなくていいです!!」

最早何の恥じらいすら持たない佐奈。この妹、なかなか危険である。

「や、でも最も強い快楽といったらやっぱり性行為かと……」

多分、間違つてはいないのだろうが場所が場所だ。白昼堂々晴れ渡った屋外、しかも神聖な教会の門前でだ。

「で、脱がせてどうするつもりだったんだ？」

雪は笑いを必死にこらえながら佐奈に問う。

「それは私も初めてですし兄さんが動けないので体位的には…」

佐奈も表情を変えずに返答する。

「さも当たり前のように受け答えるのはやめてください！！貴女
仮にも女の子でしょ！？それに神父様もなに普通になじんでるん
ですか！！」

「や、恋する乙女に敵はないっていいますし…」

「敵はいなくても恥じらいを持ってください…って何脱がせてるん
ですか！！」

「や、ほら…兄さんを元に戻さないといけませんし…」

「その方法だけは絶対絶対ぜったいダメ！！」

快晴の空にマリイの叫び声が響き渡る。

佐奈、失格。

「はあ、お前らに任せようとした俺が馬鹿だったわ…」
行人は面倒そうにつぶやく。

「そう思っただったら最初からそうして下さいよ……」
マリイは頭を押さえ大きなため息とともに呟く。

「いや、ほら…お前等が出来るのであればアイツにとってはいいだろうしな。」

「なんでですか？」

「まあ、見てりゃわかるさ。」

「そう言っつて雪は拳を鳴らす。」

「ま、まさか神父様…」

「ああ、そのまさかさ。氣い失えば元に戻んだろ、きつと。」
単純明快な結論のようだ。

「え、ちょ…ちよつと、神父様？」

マリイがひきつった笑みを浮かべながら雪に問う。

「大丈夫だろ、多分。」

雪はそう言っつて行人の前へと歩いていく。

「私が町長です。」

「お前の言いたいことはよくわかった。だからもう…黙れッ!!」
「ほぶっ!!!!」

雪の正拳突きは行人の鳩尾にクリーンヒットし、行人はずるずると倒れこむ。

しかし、それでもなおこう呟いた。

「私が町長です。」

「わ
…」

バ
キッ

「わ
た…」

ゴ
スッ

「私
が…」

「へ
ぶっ…」

「う
っせ。」

ドコッ

2分後

「あ、あの…やり過ぎ…じゃないですか？」

「大丈夫、程良く気を失う程度にしか殴ってないからな。」

町長、ノックアウト

兄、気絶

ノックアウトされた町長はびくびくと痙攣させながら床に倒れていた。

「兄さん!？」

佐奈が行人のもとに駆け寄り頬をぺちぺちと叩く。

「し、神父様!？いくらなんでもやりすぎです!！」

手に若干の血を付け雪は起き上がり大きく伸びをして清々しそうに汗を拭う仕草をしてこういった。

「ふう。」

「ふう。じゃないですよ!！なに良い仕事したみたいな顔してるんですか!？」

「いや、実際良い仕事したし…」

「してないですから!！ってなに『うわっ、こいつ空気読んでねえよ。ありえないんだけど』みたいな顔してるんですか!？」

「くあ…あ…」

雪はマリイの説教を右から左に受け流すように大きなあくびをする。

「ちよつと、神父様聞いてますか!？」

「マリイ、そんな小姑みたいなことばっか言っつとモテないぞ。」

「大きなお世話です!！」

マリイは声を荒げ雪に反論をする。

「兄さん、兄さん!？」

一方、佐奈は先程より強めに行人の頬を叩いていた。それでも微動だにしない行人を見て佐奈は考え込む。

ニヤリ

そしてポンと手を打ち口元を一瞬だけ不気味に歪ませた。

くどくどとお説教をしていたマリイも、それを聞き流していた雪も悍ましいオーラに気圧されし、佐奈の方を見る。黒いなんていう生易しいものじゃない。どす黒いオーラを佐奈は身に纏っていた。そのオーラに雪は冷や汗を流し、マリイはガクガクと身震いをした。

「あ、あの…神父様？」

「お、おう。どうした？」

雪とマリイは佐奈から視線を反らさず…否、反らせぬまま会話を
する。

「あ、あれは誰に向けてなんでしょうか？」

「さあな、マリイになんじやないか？」

「ややややややややややややややややややだなあ。多分、
きつと…いいえ、絶対神父様に向けてですよ。よかったですね。」

「道連れにすんぞ。」

「すみませんごめんなさいもうしませんちょっとだけ様ないなと思
ってしまった愚かな私をどうかお許してくださいというよりいつその
事だったら私を殺してくださいここまでの苦痛に堪え続けなければ
ならないのならもう一思いに殺してください。」

「落ち着けマリイ。強く気を持て。こんなことで生きること諦め
たら嫁にいけないぞ。」

「もう将来の夢がお嫁さんとか言う夢見がちな事言わないです。は
い……」

マリイまで頭のネジが吹っ飛んだようだ。

ゴンッ

雪はゲンコツをマリイに落とす。

「あだっ!!」

マリイは頭を抑えうずくまる。

「よく見てみる。あれは多分行人に向けられてるもんだ。」

「え?」

マリイは頭を抑えながら、佐奈を見る。佐奈は不気味に口元を引
き攣らせ行人に馬乗りになっていた。そして妖しい笑みを浮かべ、
口を開く。

「しょうがないですね、兄さん。それじゃあ改めて初めてをがっつ

り奪わせていただきますね。」

マリイと雪は悍ましいオーラの原因を見た。

すなわち、佐奈は再び行人と自身にとっての初めてをここでおっぴろげようとしていたのである。

「なにやってるんですか！！」

「や、ですからd……」

「もうその件いいですから！！さっきありましたから！！」

「ほう、そこまでそいつを襲いたいのか？」

「ええ、私の今でも続く初恋の相手ですから。」

「そういうの素敵ですね。あこがれちゃ……って！！だからなんで今度は佐奈さんが脱いでるんですか！！」

佐奈の開けたシャツを見てマリイが叫ぶ。

「や、好きな人に初めてを捧げるのは当然の義務かと……」

「当然じゃないです！！だからなんで止めてるのに無視して上半身下着だけなんですか！？」

マリイの警告を完全に無視してシャツを脱いだ佐奈は続けてスカーフトに手をかけようとしていた。

「安心しろ、俺は見えてないからな。」

雪は扉の方へと目を背けながら言う。

「それなら安心……じゃないです！！現実から目を背けないでください！！でもこっち見ちゃダメです！！」

「要は俺にどうしろと？」

雪は面倒そうに欠伸を噛み殺して言う。

「一緒に止めてください！！」

「あ、そうだ。マリイさん。」

「な、なんですか…？」

マリイは息を切らせながら恐る恐る聞く。

佐奈は歪んだ笑みでもってマリイを見つめ口を開く。

「マリイさんも一緒にどうです？」

「いやあああああああああああああああああああ
ああっ！！」

マリイの悲痛な叫び声が響き渡る。

「安心しろマリイ。薄い本くらいなら作つといてやつから。」

「そんな冗談いつてないで助けてください！！」

雪は笑いを堪え切れずに腹を抱えながら言う。

「兄さんは特に女性恐怖症なんです。そんな兄さんが怯えないということはマリイさんに対してそれなりに好意を抱いているんですよ。だから大丈夫です。」

「そりゃあ確かに嬉しいですけど…でもそれとこれとは違いますよ！！」

「大丈夫ですよ、最初は怖いかもしれないですけどきっとそれが快感にかかりますから。」

佐奈はじりじりとマリイに近寄っていく。マリイはじりじりと後ずさっていく。そして背後の壁に当たり、マリイは怯えた表情で目に涙を浮かべながら叫ぶ。

[illegible]

周圀の喧騒に起こされ行人がけだるそうに目を開け見たものは……

「ほら、もうちょっとじゃないですか。そのローブ、脱いじゃいましょうよ。」

「こ、これだけは…私は聖職者ですし…別にイクトさんが嫌ってわけじゃないんです…でもやっぱりこういった肉体関係というのは…」

上半身下着だけで馬乗りになっている佐奈と脱がされそうになっているローブを必死で守るマリイ。そして欠伸をしながら小説を読み耽る雪の姿だった。

行人は大きく息を吸い込んで今までにないくらいの大声で叫ぶ。

「つぎや ああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああつ
！！あああああああああああああああああああああ
っ！！」

兄、説教

「まったく…」

講堂全体に反響するほどに大きな声で叫んでから5分。行人は佐奈からマリイを引きはがし、佐奈に服を着せ、雪に現状の説明を求めた。そしてすべてが一通り終わり、腰に手をあて大きく息を吐いた。行人の眼前には服を着て正座をする佐奈と、貞操の危機が守られた安堵からかへなへなと座り込んだマリイ。そして我関せずといった調子で小説を読みつつづける雪。

「まず神父。あんただけは冷静でいてくれて助かった。」

「意外だな、まずは止めなかったことを咎められるかと思ったが…」
「俺もそこまで馬鹿じゃない。あそこであんたが止めに行つて佐奈に巻き込まれたりしてみろ。想像するだけでもぞつとするような結果しか待つてないだろうよ。」

「ということは…経験ありか？」

「まあな。俺が襲われそうになつてのを止めに入つたクラスメイトを4人ほど巻き込みかけたことがあつてな…」

佐奈は少しむすつとした様子でそっぽを向いていた。

「その時はどうやって止めた？」

「後ろから知り合いが佐奈の気を失わせてくれて事なきを得たんだ…」

マリイは先程の佐奈の不気味な笑いを思い返したのか身震いをする。

「次にマリイ。すまなかつたな。」

「い、いえ…私は大丈夫です。」

「佐奈はストッパーが外れると止まらないんだ。だからあんまり刺激しすぎるとさっきみたいなことになっちまう。それを先に言っておかなかった俺の手落ちだ。本当に悪かったな。」

行人はマリイの髪の毛をくしゃくしゃと撫でる。するとマリイは心地良さそうに目を閉じていう。

「少し怖かったけどもう気にしていませんから。」

「そう言ってもらえると助かる…」

行人は安堵の息を漏らす。

そして深く息を吸い込み佐奈を見る。

「で、佐奈。お前はなにをしてたんだ？ん？」

「兄さんと関係を持つとうとしていました。」

「素直でよろしい。」

そういうと行人は佐奈のこめかみを掴む。

「痛いです！！痛いです兄さん！！」

頭を捕まれた佐奈は手をばたつかせ抵抗する。

「それはそうだろう。痛くしているんだからな。」

「なんで痛くするんですか！？」

「お前の行動が元凶だろ！！」

「良いじゃないですか！！好きな人と関係を持つちゃいけないって誰が決めたんですか！？」

佐奈の反論に一拍おいて行人は口を開く。

「都知事だ！！」

「へ？」

行人の言葉がよく解らないのかマリイは首を傾げる。

「都知事が規制をし始めたから諦めろといっただろ！！」

「なんで恋愛を諦めなきゃいけないんですか！？」

佐奈は強い語気で行人に詰め寄る。

「別に青春禁止令が出されたわけじゃない！！普通の奴とは好きなだけ付き合えば良い！！」

行人も物怖じせずに言い合う。

「なんで兄さんはダメなんですか！？」

「俺がお前の兄、親族に値するからだ！！」

「そんな条例幻想です！！私の手でぶち壊します！！」

「いや、お前の手に幻想殺しついてないだろ。それにここもう東京じゃないぜ。」

雪の冷静なツツコミに空気は一瞬で凍り付く。

「し、しまつたあ……！！」

行人は苦悶の表情を浮かべ頭を抱える。

「お前詰めを忘れてどうするんだよ……」

「トウキョウ？ジョウレイ？何ですか？ソレ。」

「まあ、こいつのいた世界では兄妹間の恋愛なんかが禁止されるようになったってわけだ。」

「はあ……」

マリイは小首をかしげながらも了承する。

「にーいさんっ」

ビクッ

佐奈の笑顔に行人は肩を震わせ後ずさりを始める。

「ここはもう東京じゃないですしあんな忌々しい条例もここには存在しません。兄さんと私の愛をじゃあする不逞の輩はもうどこにもいませんよ。」

「い、いやまで……俺にだって恋人を選ぶ権利ぐらいある……!!」

「確かに兄さんには権利があります。それと同時に私を選ばなきゃいけない義務もあります。」

「滅茶苦茶だ!!」

ダンダンダンッ!!

行人と佐奈が言い合う中教会の門が叩かれた。

「ほ、ほら…人が来ただろ！！この話はまたいずれかにしよう！！」
「しょうがないですね…」

行人は命拾いをしたかの様に胸をなでおろし、佐奈は苛ついたようにそっぽを向いた。

「神父様、お客さんみたいですネ。」

教会の門をたたいたものが声を上げる。

『スノー、スノー神父はいるか！！』

「おうおう、最高のタイミングで最悪な奴らが来たもんだ。」

「スノーって誰だ？」

「俺のこっちの世界での名前だよ。」

そして雪は大きく息を吐き面倒そうにつぶやく。

「はいはい、いますよ。」

兄、傍観

雪が返事をする大きな扉が開き、鎧を纏った兵を20から30ほど連れた大男がずかずかと入ってくる。

「ん？誰だあれ？」

行人が佐奈との言い合いから話を逸らすようにマリイに聞く。

「あの方達は帝国軍の部隊でよくこの地のマナの採掘をしようとこにやって来るんです。」

「なんでこの教会に来たんです？」

佐奈も先程までの会話を忘れたかのようにひょっこり口を挟む。

「それはわかりません。私は話し合いの時はいつも席を外すようにと言われていたので…」

「そうか。」

そう言って三人はしばらくいきさつを見ることにした。

「スノー神父、今日こそはマナの採掘地を明け渡していただくぞ！」

大男は鼻息を荒げ雪に詰め寄る。

「ふむ、フォスター大師団長が直々におでましとはなかなかどうして帝国も諦めが悪いな。」

雪は呆れ顔でフォスターと呼ばれた大男を見る。

「それもこれもお前が採掘地の権利を我がリミドア帝国に明け渡せば万事解決することだ。」

フンと鼻を鳴らし、フォスターは雪を睨む。

「まあ、客人がいるので場所を移して話し合いませんか？」

雪は顎で先程まで行人が眠っていた部屋を示した。

「生憎、我々は急いでいるのでな。この場の方がよいのだが。それに民達にも話は聞いてもらった方がよいのではないかな？スノー神父。」

嫌味な笑みを顔に浮かべフォスターは雪を見つめる。

「わかりましたよ、それじゃあ話を続けようじゃないか。」

雪は敬語を使うのが面倒になったのか普段の口調でそう言った。

「我がリミドア帝国は現在グロリア、アペンドと緊迫状態にある。

近いうちに戦争になるだろう。戦争をするには力がある、マナの力がだ。そして帝国支配地で一切マナの採掘が行われていないのはこの村だけだ。この村のマナは元々我がリミドア帝国の所有物である、よってこの地のマナ採掘権所有者である貴様にマナの採掘許可をわざわざ取りに来てやっているのだ。」

フォスターは一通り言い終えると見下すように雪を軽く睨んだ。

「マナの採掘権の所有者がどうして神父様のですか？」

マリイは疑問をあげる。行人と佐奈も同じ事を思ったのか首を縦に振った。

「ハン、なんでも権利を村長より譲り受けたそうだ。」

フォスターは恨めしそうな表情で雪を睨む。

「じゃあ、俺からも良いか。なんで強行で採掘をしない？」

「それが出来たら苦労はせん。こやつがなにかをしているせいで入れんのだ。」

行人は雪の方を見てから黙る。

「そもそのあんたらの前提がおかしいんだ。あそこは元々リミドア、アペンド、グロリアのどこにも属さない中立地区だ。そしてあの地の管理は常にこの村で行われてきている。いまさら占有権を主

張したところで誰も従わないだろうよ。それに世界中のマナが枯渇している現状において戦争なんてくだらない理由でマナを消費することは許可できない。」

雪はフォスターに向けて嫌悪感を示しつつ話す。

「何？戦争がくだらない…フツ何を馬鹿な事を言っている。戦争に勝利して初めて安定した世界を作り上げることが可能なのだ!!」
フォスターは拳を強く握り声を張る。

「勝利万歳！つてか。ふん、やっぱり軍人なんてもんとはうまくやっ
つていけないな…」

「何だと？」

フォスターは顔をしかめる。

「結論から言おうか？フォスター大師団長殿。答えはNOだ。あん
たらみたいに人の意思や願いを無視して己の欲にしか興味を示さな
い奴らがかぎりあるマナを搾取していく事だけは認められないな。」

「おつ、良いこと言っただな。」

雪の言葉を聞き行人達はこそそと会話を始める。

「そうですね。戦争に協力なんて出来ないですね。」

「私、あの人嫌いです。」

「ただ、ここからどうなるかだな。」

「どういうことですか？」

「あれだけはつきりと断つては向こうが何して来るかわからない
てことですよね？」

「マリイ、察しが良いな。」

「ありがとうございます。」

そう言つて三人は再び雪とフォスターの会話に集中する。

「貴様、我々を愚弄しているのか？」

フォスターは額に青筋を浮かべ雪を睨み付ける。

「おいおい、天下の大師団長がこんな若造に言い負かされるのかい？こりゃあおちおち城にも戻れないな。」

雪はからかうようにフォスターを煽る。

「もう許さんぞ！！お前ら！！そのガキ共全員抹殺しろ！！」

「ええっ！！」

「まずいですよ兄さん！？」

マリイと佐奈が慌てだすなか行人は表情一つ変えずにあっさりと言
い放った。

「神父が何とかするだろ。」

「へ？」

次の瞬間、兵士達の纏っていた鎧や手に持っていた武器がかけらになつて飛び散った。

兄、駄々

「白羅真流剣術抜刀初めの太刀、枝垂桜。久しぶりに抜刀なんかや
ったから腕が鈍ったか。」

長刀に手をかけながらのんびりと呟く。

「ああ……」

兵士達は全身から力が抜けたかの様に尻餅をついたり死を感じて
逃げ出したりした。

「臆病者共が！！貴様ら全員クビだ！！」

「クビは良いが大師団長殿。残るはあんた一人だけ。」

雪が余裕のある声でフォスターに語りかける。

「貴様…何をした…」

フォスターが青ざめた表情で弱々しく雪を睨む。

「あれ。見えなかったのか？」

雪が意外そうにフォスターに問い返す。

「お前達はどうだ？見えたか？」

行人と佐奈、マリイは首を横に振る。

「そうか…致命的なほどまで落ちたわけじゃないか。」

一人で勝手に納得した雪はフォスターを茶化すように言う。

「説明すると全部斬ったんだよ、あの瞬間に全員の鎧と武器を。あ
んなのが見切れないとは大師団の名折れだな。」

「見える訳無いですよねえ……」

「兄さん確か剣道有段でしたよね？」

「一応はな……でも一振りにしか見えなかった……多分あれ見切れるのは剣の達人くらいだろうさ。」

行人達は少しフォスターを哀れみながら会話をする。

「き、貴様……!!」

フォスターは剣を抜き雪に襲い掛かった。

しかしそこに雪の姿はない。フォスターは辺りを見回し自分の首筋に冷たいなにかが当てられていることに気がついた。

「敵に真つすぐ突つ込むのはまさに愚の骨頂。煽られてすぐに逆上するのは騎士として最低な行為だな。」

「ぐうっ……!!」

雪の冷たい声にフォスターは苦虫をかみつぶしたような表情になる。

「選ばせてやるよ大師団長殿。ここで死ぬか恥を覚悟で逃げ延びるか、好きな方を選びな。」

「ぐぬうっ……!!」

フォスターは剣を落とし、険しい表情で一瞥し走り去って行った。

「まったく、面倒な事ばっかだな。」
刀を鞘に戻し雪は溜息をつく。

「見事なもんだな。」

行人達は雪のもとへと寄って行く。

「凄いです、神父様!!」

マリイは歓喜の声を上げる。

「そうでもない。それより…」

雪は行人と佐奈を見つめる。

「覚悟は決まったか？」

「さっきも言っただけ俺は絶対に嫌だからな。」

さっきとは行人が町長になる直前である。

「私は良いと思いますけどね。」

「私はイクトさんなら世界を救えるって信じてます!!」

佐奈とマリイは行人に期待の目を向ける。

「嫌だぞ、俺はやりたくない。」

行人はふてくされながらそっぽを向く。

「何が嫌だ？」

「まず人が嫌いなんだ。いや、怖いんだ。」

「それは沢山人に会えば見方がかわるかもしれないだろ。」

「それにRPGの定石として、誰かが死ぬじゃないか。それはどうしても嫌だ。」

行人は険しい顔をして訴える。

「安心しろ。これはゲームじゃない。定石なんて物は考えなくても良いしもしなんかあった時のために俺達だって召喚されているんだ。」

雪は行人の退路を絶つように答える。

「スライムさんと戦いたくない。」

「だったら会わなければ良い。」

「…」

詰んだようだ。

「と、とにかく俺は嫌だ!!」

子供のように行人は駄々をこねる。すると佐奈が微笑んで言い放

っ。

「もし、断るのであれば私と関係を結んでくださいね。」

「ごめんなさいやりますやらせていただきますやらせてください万事に当たって全力で取り組みさせていただきます勇者らしくなれるかどうかはよく解らないけどとにかく動き出してみようと嫌々ながらも考えている所存でいやすみません嘘です嫌々なんかじゃありません喜んでやらせていただきますだからそうやってワイシャツを脱ぐのをやめてくださいお願いしますですからといって今度はスカートを脱ごうとするのはやめてくださいというよりも服を脱ごうと考えるのをやめてください断らないし関係も結ばないので服を脱ぐのをやめてください。」

行人の駄々は一瞬にして止まった。

兄、安息

「よし、そんじゃ決まりだな。」

行人の半ば投げやりな解答に雪は満足そうに頷く。

「はあ……」

行人は大きく溜息を漏らす。そして顔を上げて真剣な面持ちで雪に問いかける。

「で、具体的に俺達は何をすれば良い？」

「そうだな。まずは武器が必要だろ？」

「まあそうだな。でもどうするんだ？俺達文房具や包丁程度の凶器しか持ったことないぞ。」

「安心しろ。知り合いにいい武器職人がいるんだ。お前達に合った武器を作ってくれるだろうよ。」

雪は大きく伸びをしながら答える。

「で、その人はどこにいらっしゃるんですか？」

「ん？ああ、この村を出て少し街道を進んだところにガレットという村がある。そこにいる未来って奴に会え。」

「そういえばあんたはついて来ないのか？」

行人は至極当然の疑問を雪に投げ掛ける。

「残念がらな。」

おおっぴらに手を広げ雪は演技がかった口調で言う。

「あんた残念がつてないだろ。」

「まあな。でもいけないのは本当だ。俺はこの村の結界を護り続け

なくちゃならないんでな。」

雪は気怠そうに首を鳴らす。

「結界？」

「ああ、説明してなかったな。さっきの…フォスター大師団長殿が言ってたろ？なんかがあつて採掘地に入れないって。」

「ええ、確かに言っていましたね。」

「ソレ、俺が張ってる結界なんだよ。」

「へ？」

佐奈とマリイは揃って首を傾げる。

「帝国軍が勝手に入り込んでマナを奪い尽くさないようにあそこの採掘地を護ってるんだよ。」

「でもそれがなんで一緒に行かない理由になるんですか？」

マリイは首を傾げながら雪に尋ねる。

「この教会が結界の媒介になっていてるって言えばお前はわかるだろ？」

「あ…」

マリイは口を手で覆う。

「どういうことだ？」

行人は疑問が残っているようで雪に尋ねる。

「それは私が説明します。結界を張るためには強い魔力と魔力の宿った媒介が必要になるんです。そして術者は媒介から極端に離れてはいけません。」

「つまりガレットまで行くのも厳しいんだ。俺は結界張るのが下手だからな。」

雪はそういつて嘲笑する。

「そうか…」

それから行人達は先程の部屋に案内された。

「俺は飯作つから。まあ、好きにしてくろよ。」

そう言つて雪は部屋をあとにした。

「あいつ料理できるのか？」

行人はのんびりとお茶を啜っているマリイに問い掛ける。

「残念ながら私より凄く上手いです。」

「それはマリイさんが苦手なだけってオチはないですよね？」

「む、サナさん。私の事、馬鹿にしていますか？」

マリイは頬を膨らませ抗議する。

「や、そういうわけでは……」

マリイと佐奈は雑談を始める。そんな中行人は一つの写真を見つめる。

「これは……」

写真の中身は集合写真の様だった。揉みくちやになりながらもみんな笑顔の写真。その中心にいたのは……

「懐かしい写真だな。」

「いつのだ？」

「2年前かな。ま、そんな話はおいというて飯出来たぜ。」

雪は行人の持っていた写真立てを伏せるようにおく

「じゃあ、行きましようか。」

四人はそれぞれ部屋から出る。

「お、美味しい……」

「当然だな。簡単な料理はできなきゃ生きていけないからな。」

「なんかやたらと家庭的な味だな。」

「なんだ？高級感漂う方が良かったか？」

雪は行人の感想に少し拗ねた様に返す。

「いや、このくらいがいい。」

「そうかい。」

そしてしばらくにぎやかな晩餐が続いた。

「んで、さっきの続きなんだが…」

雪が唐突に口を開く。

「出発は早いに越したことはない。明日にでも村を発つのが良いだろう。」

「偉く急な話じゃないか？」

「もうマナの残りにも余裕がないからな。」

雪と行人は低い口調で話を続ける。

食事後は各人部屋に行きそれぞれ眠りに落ちた。

兄、出発

翌朝行人たちは朝食を終えるとすぐに出発する準備を始めた。

「神父様、おやつはいくらまでですか？」

「これは遠足じゃない。」

「飲み物はお茶がちよつとでも入っていればいいですか？」

「だから遠足じゃねえって…」

「バナナはおやつにはいりますか？それとも食後のデザートですか？」

「はあ…」

約2名遠足気分である。

そんな二人に雪はただただ深くため息をつくだけしかない。

「どうした？やけに疲れてるみたいだな。」

一人先に準備を終えた行人が雪に話しかける。

「あの遠足気分のバカ共をどうにかしてくれ…頭が痛い…」

「ああ、ご苦労さん。」

行人の労いの言葉に雪は弱々しく片手を上げる。よほどこたえているようでどこともなく顔色も芳しくない。

「そういえば道はマリイが知ってるんだよね？」

「ああ。ガレットの方にはすでに連絡は飛ばしたから大丈夫だと思うが一応神父の紹介だと言ってくれ。そうすりゃ快く迎えてくれるはずだからな。」

「そうか。んで、武器作った後はどうすればいいんだ？引き籠れば

いいのか？」

「引き籠るなよ。まあ、その先のことは向こうの奴らが教えてくれるだろうしまあ気にすんな。ちなみに何があっても引き籠らせないからな？」

「フツ…何が何でも引き籠ってやるさ…」

二人の間にかすかながらも火花が飛び散った。

「まあ、それはさておき…」

そう言って雪は後ろを振りかえる。

「サナさん楽しみですね！！」

「ええ、そうですね。」

「アレはどうしたらいい？」

「諦めた方がいいんじゃないか？」

佐奈とマリイは楽しそうに準備を続けている。

「「はあ…」」

雪と行人はため息をついた。

10分後…

「準備終わりましたよ、神父様。」

「お待たせしました。」

準備の出来あがった佐奈とマリイは意気揚々と雪と行人に話しかける。

「そうか、とりあえずこれでやつと出発できるな……」

行人は待ちくたびれたのかあくびを噛み殺しながら言う。

「短い間だったけど世話になったな。」

「んだよ、別に今生の別れじゃないんだ。またいつでも来いよ。」

「まあ、そうだな。」

行人と雪は軽く挨拶を交わす。

「んじゃ、マリイ。二人の案内しつかり頼むぞ。大事な勇者を死なせたりなんてするんじゃないぞ。」

「はい！！頑張ります！！」

「さあ、おしゃべりはここまでだ。最後に神父らしいことでもやっておくかな……」

そう言っただけで雪はすうっと息を吸い込み瞳を閉じる。

『天と地を創りし大樹の御霊よ、その恵みにより生を受けし者達に今一度ご加護を与えたまえ。そして彼らの旅路を大樹より見守りたまえ。』

「貴殿らの旅路に幸多からんことを……」

そう言葉を結び雪は顔を上げる。

「さあ、行って来い。スライムが来たら逃げるんだぞ。」

そう、笑いながら三人に話しかける。

「ああ、行ってくる。」

「行ってきます。」

「神父様もお元気で。」

行人、佐奈、マリィの三人は雪に見送られながら村を後にした。

兄、入店

道中何度かスライムに遭遇しかけた行人たちだったが何とかそれをかいくぐりその日のうちにガレットの村にたどり着くことができた。

「無事に着きましたね、兄さん。」

佐奈は小さく息を吐き行人に話しかける。

「ああ、5回目にスライムさんに出会った時にはさすがにもう駄目だと思ったな……」

ちなみに道中12回スライムにエンカウントして気付かれずに撤退したのが11回。つまり5回目のエンカウントの時だけスライムに見つかってしまったのである。

「あのときばかりは藁にでも何にでもすがりたい思いでしたね……」

「あんなに死にも狂いで走ったのは2年ぶりです、出来ることならもう2度と会いたくないですね……」

行人たちにとってスライムは難攻不落の超強敵ポジションに収まっているようだ。

「生きてガレットにたどり着けたんですからとりあえずお店の方を探しましょう。」

仕切り直すようにマリイが口を開く。

「そうですね、まずは情報収集を……って何逃げようとしてるんですか？兄さん。」

「ほら、俺人見知り激しいし緊張すると最悪泡吹いて倒れるし人怖いし人怖いし人怖いからお前たちに任せようかと思ってな……」

「まったく……しょうがないですね。それじゃあ兄さんはそこで待ってて下さい。マリイさん行きましょう。」

「あ、はい。」

佐奈とマリイが相談してるのみ微塵も興味を示さない行人はあたりを見回し一つの看板を見つけた。

「『Eine Waffe』…ドイツ語で武器って意味だな。明らかにこの世界の言語とは違うし…おい、佐奈、マリイ。神父の言ってた武器屋ってここじゃないのか？」

そうは言ってみたもののすでに佐奈とマリイはどこかに行ってしまったようであたりには誰もいなかった。

「はあ…とりあえずここであいつら待っても始まらないし気乗りしないが入ってみるか。」

そう言って行人は『Eine Waffe』と書かれた看板の建物の扉を開ける。そこで行人が目にしたのは…

「おかえりなさいませ、ご主人さま…！」

「お、おかえり…なさいませ…あ、あの…その…ご主人様…？」

メイド×2だった。

「すまん、間違ったようだ。」

行人は何もなかったかのようにあくまで冷静に扉を閉めようとする。しかしそれは快活なメイドによって阻止される。そう

「お客さん、それはないよ。勝手に入ってきて間違いましたか？
なんなんだよまったく。舐めてんのか、やる気あんのか、つかやん
のかコラー！」

随分と喧嘩腰なメイドである。

「ちょ、ちよつと舞ちゃん…私たちがこんな格好でお客様の前に立
つたらそれはお客様だってメイド喫茶と勘違いしちゃうよ…」

おとなしそうなメイドが発狂寸前のメイドを諫める。そして咳払いをしてから行人の方に向き直り口を開く。

「申し訳ございませんお客様。誤解を招いてしまったのであればお詫び申し上げます。武器工房『Eine Waffe』へようこそ。
本日はどのような御用件でしょうか？」

あまりにも落ち着いた優雅な動きに行人は見蕩れる。そして思い
だしたかのように口を開く。

「ああ、雪という神父から連絡があつたと思うんだが…」

「雪様から…ですか？」

「ああ、あいつから連絡を入れてもらってる筈なんだが…」

「そ、それでは少々お待ちいただけますか？舞ちゃん、マスターに
確認してきて。」

「あいあいさー！！！」

快活な方のメイドは奥の方へと走り去って行った。

2分後…

「うん、連絡あつたみたいだよ紅。」

「ありがとう、舞ちゃん。あれ？マスターは？」

戻ってきたメイドと待っていたメイドが話し始める。

「んー？なんかあの格好じゃ出たくないんだって。」

快活な方のメイドがニヤニヤしながら言う。

「あ、そうか…でもお客様をお待たせするわけにもいかないし…舞

ちゃん、一緒に引つ張つてきましょう?」

「おういえ!!」

「あの…それではお客様、もうしばしお待ちいただけますか?」

「あ、ああ…」

5分後…

「さあ、マスター。そんなに駄々をこねないでください。お客様がお待ちですよ。」

「分かつてるよあ…それでもこの格好だけは嫌なのにい…」

「まあまあ、一時の恥ですって。誰も気にしませんよそんなの。」

「や、やっぱりこの服は嫌!!」

先程のメイドたちがマスターと呼び引つ張つてきたのは…

「うう…いらつしゃいませ…」

メイドだった。

兄、見拔

行人はメイド×3に迎えられたただただ茫然としていた。

「やっぱりメイド喫茶と間違っただようだ。すまない、出直してくる。」

「ちょ、ちよつと待って下さいよ！！哉雅君から連絡があつた行人さんですよ。」

その場を立ち去ろうとした行人をマスターと呼ばれていた最も小さなメイドが引き止める。

「哉雅？誰だよそれ。」

聞き覚えのない名前に行人は聞き返す。

「はい。哉雅雪君、教会の神父様です。」

「ああ、あいつか。」

行人は足を止め振り返る。

「こ、こんな恰好で申し訳ないですけど…改めまして武具工房『eine waffe』によろしくお世話になってます。」

恭しく礼をする小さなメイド。顔を良く見ると小動物のような愛らしい顔立ちと肩までかかる栗色の髪が綺麗に光っている。

「あの…つかぬ事をお伺いしますがあと二人いらつしゃると哉雅君から伺っているのですが…」

「ああ、ここを探しに情報収集へ行っちゃったよ。」

「そうでしたか…」

「あと、その敬語。やめにしてくれないか？」

「ふえ？」

「あんたの方が年上だろ？」

行人がそう返すとメイドは少し驚いた後おもしろいものを見つけ

たかのように口を開く。

「判断の根拠は？」

「神父から聞いてなかったか？俺は人が嫌いなんだよ。嫌い過ぎて雰囲気とかを敏感に感じ取っちゃう。それだけだ。それにあいつとはそこそこ長い付き合いみたいだしな。」

「ほう、良い目をしてるね…」

メイドは敬語をやめ行人に興味深々な目でみる。

「ちなみに、気付いたことが一つ、気になったことが一つあるんだが聞くか？」

行人はメイドから視線をそらしながら言う。

「是非お願いしようかな。」

メイドは好戦的な瞳で行人に返す。

「まず気付いたことだが…」

そう言うて行人は小さなメイドの少し後ろに立つ二人のメイドを少し見てから口を開く。

「その後の二人、『真人間』じゃないよな？」

「「！？」」

メイド二人が驚きを浮かべるなか小さいメイドが変わらない調子で口を開く。

「すごい、凄いよ行人くん。紅ちゃんと舞ちゃんの異能に気付くなんて。」

「なんか普通の人間とは違う…なんというか、回路みたいなを感じるんだ。」

「ほえ…行人くん、もしかしたら魔術とかの才能あるかもよ？」

今の行人の発言に流石の小さいメイドも驚きの声を漏らす。

「まさか見抜かれるなんてね…」

快活なメイドがやつとの思いで口を開く。

「ま、お前らが人間じゃなかるうがなんだろうが俺には関係ない。

苦手なもんは苦手だからな。」

「あはは…そこまで苦手なの？さっきから目も合わせてくれないけど…」

「無論だな。こっちに来てからずっとわけのわからんことばかりで人と話すことには少しずつ慣れてきてはいるが目だけは合わせ合わせる気が起きてこない。」

メイドの質問に行人は堂々と答える。

「うーん…そつか…それで？気になったことって？」

小さなメイドが行人に続きを促す。

「ああ、それが…」

行人は一拍置いて口を開く。

「あんた、何でそんな恰好なんだ？」

「ほえ？」

「いや、あんた何でメイドの恰好してるんだ？」

「え？何でと言われましても…」

「いや、何で男のあんたがそんな恰好をしてるのかなって…」

「あ、これはその…ここ最近雨がずっと続いてたまってたお洗濯を洗っていたら着ていない洋服まで洗ってしましまして…だからし
ようがなくこの服を…って、ほえ？」

「どうした？」

「あの…今なんて？」

「どうした？」

「いや、もうちょっと前…」

「あんた何でメイドの恰好してるんだ？」

「た、多分もうちょっと後？」

「何で男のあんたが…」

「そこっ！…」

「お、おう…」

「も、もう一回言って？」

「え、ああ…何で男のあんたが…」

「…」

「え、おい……」

「ありがとうっ！！」

ガバッ

「うわっ！？」

メイドは目に涙を浮かべながら行人に抱きつく。その反動でメイドが行人の上にかぶさるようになして倒れこむ。

「何だよいきなり……」

「失礼します。」

行人が押し倒された直後に店の扉が開き佐奈とマリイが中にはいつてきた。

「……」

その場で全員がフリーズした。

「「は？」」

メイドと行人が硬直する。

「なにが『は？』なんですか！！今の体勢どうやって説明するつもりなんですか！！ロリですかロリロリなんですかロリロリメイドたんはあはあなんですか見損ないましたよ兄さん！！私が折角オールジャンルオールコスプレオール体位でもてなしてあげようとしているのにそれを断つてあるうことかロリロリメイドさんとイチャコラしようなんて！！ロリが良かったんですか！！ロリロリつるぺたメイドさんが良かったんですか！！実は私脱ぐとつるぺたに……」

「落ち着いてくださいサナさん！！ロリロリ言い過ぎて意味が分からなくなってます！！」

「これが落ち着いていられますかマリイさん！！ロリコンダメ、ゼツタイ！！は万国共通の合言葉なんですよ！！それなのに兄さんは……見てくださいよ！！小学校高学年じゃないですか！！ロりんロりんじゃないですか！！最早犯罪クラスじゃないですか！！確かに美少女ですよ！？女の私たちでも思わずハツとするような美少女ですよ！？だからと言ってそんなイチャコラぶつ放す理由にはならないんですよ！！」

「しょ…」

「た、確かに見た目10歳くらいに見えます！！まままままさかイクトさん本当にサナさんの言うとおりロリコンなんですか！？そそそそそうだとしたら今すぐ懺悔してください！！今なら神様もきつとお許しになってくれるはずです！！」

「じゅ…」

「落ち着けお前ら話せばわか…」

「兄さんが落ち着いてください！！私だったらどんなコスプレでもどんなジャンルでもどんな体位でもどんなキャラでもこなして要望にこたえて見せます！！だからそのロリロリメイドと関係を持つてまた出馬表明したどこぞの都知事に刑務所にぶちこまれる前に私の処」

「だから何で今度はそうなるんですか！！こんな昼間にしかも他の

「そうだろ？」

「う、うん。俺は男だしさっきのあの体勢は男って言ってもらえたのが嬉しくて思わず飛びついちゃって…」

「「へ？」」

「ちなみに歳は神父とタメだそうだ。」

「「えええええっ！？」」

佐奈とマリイの声が村中に響き渡った。

兄、反省

「申し訳ありませんでした!!」

佐奈とマリイはメイドに対して深々と頭を下げている。

「あ、あのなんとご説明したらよいのでしょうか、あまりにも美しい外見でしたのでつい女性なのかと…」

「ロリロリメイド…」

「うつ…」

「あ、あの…サナさんをあまり責めないであげてください…別にサナさんだって…」

「10歳…」

「うつ…」

佐奈もマリイもメイドに対して返す言葉も見当たらないらしくただただ謝り続けている。

「あんた、今の状況楽しんでないか？」

「「えっ？」」

行人の言葉に佐奈とマリイが首をかしげる。

「そうですねマスター。それにあんまりいじけていても過去は何も変わりませんよ。」

行人の後に大人し目のメイドも口を開く。

「そんな顔しているとスク水に着替えてもらっちゃいますよ？」

快活そうなメイドが小さなメイドにトドメをさす。

「あ、あれだけは勘弁してっ！！もういじけないから！！」

最大級の破壊力を持っていたのかメイドはすぐにあわてた表情でわたわたとする。

「あうう…行人くんが気付くからあ…」

そして少し恨めしそうな目で行人を見る。

「悪かったな。さっきのことコイツらも悪気があったわけじゃないんだ。ちよつと頭がおかしいんじゃないかってところもあるがな。」

「ちよ、兄さん…それどういうことです？」

「あ…うん、いいよ。別に怒ってたわけじゃないし。」

「あ、華麗にスルーですか…」

「それでは改めまして…はじめまして、甲斐原未来です。ミクとお呼びください。神父の雪君とは同級生でした。性別は男です。」

「はじめまして、紅と申します。マスターの補佐を務めさせていた

だいています。こちらの世界ではアカと呼ばれております。」

「やほやほ！舞って言います。紅といっしょにマスターのお手伝いしてます。いちおこっちの世界でもマイって呼ばれてます！！」

メイド3人がそれぞれ自己紹介をする。続いて行人たちも自己紹介をする。

「大川行人。つっても基本は神父から連絡来てるか。」

「対人恐怖症に関しては初耳だけどね……」

「はじめまして、妹の大川佐奈です。」

「はじめまして、シスターのマリイです。」

「貴女がマリイさん……」

「はい、そうですか……」

マリイを見たまま未来は考え込む。

「どうかされましたか？」

「い、いえ……」

未来は顔を上げて口を開く。

「それで、武器……だよね？」

「まあ、そうなるな。」

「作って差し上げたいんだけど今手元にある素材ではあまり良質の武器は作れなくて……」

「鉱物がないってことか？」

「申し訳ないんだけどね。」

行人は面倒そうに頭をかき口を開く。

「俺らで採りに行ってくる。」

「ホントに！？」

「ああ、無理言って武器作ってもらうのに任せっぱなしってのもなんかな……」

「それじゃあお願いしよっかな？」

「二人もそれでいいか？」

「ええ、問題ありません。」

「でも目的地は分かるんですか？」

「それは問題ないよ。ホラ。」

マリイの質問に雪は水晶のペンダントを見せる。

「これは強い魔力を持った者に反応する水晶なんだ。あの森には人はいないはずだし多分コイツの示す方へ進んでいけば鉱物にたどり着けるはず。」

そう言っぺペンダントを行人に渡す。

「あとは…紅ちゃん。アレを…」

「Yes sir」

そう言っぺ紅が行人と佐奈に渡したのは…

「ラムネ？」

「そう見えるかもしれませんがコレは魔術回路を通すための薬です。副作用はありません。使えるかの素養はまだ分かりかねますが飲んでおいて損はないと思いますので。」

「そうか。それじゃあ飲ませてもらうか。」

そう言っぺ飲みこむ二人。

「後は…舞ちゃん。」

「Yes my master」

そう言っぺ舞は三人に武器を渡す。

「いちお鉱物手に入れるまでの護身用だよ。レンタルだから壊さないでね。」

「ありがとうございます。」

ドンドン！！

三人が出発の準備をしようとしていると乱暴に戸をたたく音がする。それに続き…

「おい、武器屋！！いるのか！！」

「ん？どつかで聞いた声だな…」

行人が首をかしげていると扉が乱暴に空き見覚えのある大男が乱入してくる。

「出た、小物…」

舞があきれた目で見るその先にはフォスターが立っていた。

兄、激昂

ずかずかとフォスターは店の中に侵入してくる。

「しっしっ、こつちくん小物つ。」

舞は舌を出してフォスターに不快感を示す。

「舞ちゃん、めっ。申し訳ありませんフォスター様、本日はどのような御用件ですか？」

紅が舞を諫めフォスターに話しかける。

「フン、店員くらいきちんとしつける。まあいい、今日は剣を打ってもらうぞ。」

「剣、ですか？フォスター殿。」

「ああ、あのいけ好かない神父を叩き切れる剣を造れ。」

フォスターは相当苛立っているのか早口で話し始める。

「わ、またスノーの旦那に負けたんだ。あははっ、良い様だね。」

「き、貴様……」

フォスターは舞の挑発に怒り心頭なように腰に差してある剣を抜こうとする。

「申し訳ありませんフォスター殿、舞には後で言い聞かせておきますのでどうか剣を収めてください。」

「な、何ですかマスター。こんな小物に何で頭下げてんですか！。」

「舞。」

「う、すみませんでした……」

未来の気迫に気圧され舞は洪々フォスターに頭を下げる。

「フン、ならば早く剣を打て。」

「申し訳ありませんフォスター殿。今工房の方に鋼屑しか残っておらずとてもではありませんが剣を打てる状態にないのです。」

未来が深々と頭を下げるとフォスターは恨めしそうに舌打ちする。
「何！？まったく、使えん屑だな。」

「うっは、フォスター終わったな、くくくっ。」

舞が笑いながら目をやる先に行人たちも視線を向けると…

「おい、今テメエはなんつつた…」

「あ…」

「テメエは今なんつつたかって聞いてんだよこの三下がアッ!」

吹っ飛ばされ茫然としているフォスターと先程までの小動物のよう
なオーラではなく悪鬼羅刹のような禍々しいオーラをまとった未
来の姿だった。

「ななななななななな…!」

「あ、あの…できれば説明を…」

「あ、はい。私たちのマスターはある条件下でしか怒ることはないんですけど怒ると本当に恐ろしいと言いますか…」

慌てふためく佐奈とマリイに説明をする紅。

「止める方法は？」

「この世界でなら止められんのはスノーの旦那だけだよ。何でか私たちには止められないんだよねー。くくくつ、フォスターざまあみる。」

「き、貴様あ…!!」

フォスターが怒りにまかせて剣を抜き襲いかかる。

「危ないっ!!」

佐奈とマリイが叫んだ瞬間…

バキッ

鈍い音とともにフォスターの件が無残にも折れた。

「け、蹴りで剣っておれるものなんですか!？」

「普通の方には無理だと思いますよ。」

佐奈の言葉に紅は丁寧に戻す。

「鉄でできた剣は斬るためではなく刺すために振るうもんだ。そんな飾りもんの剣でこの俺をぶつ殺せるとでも思ったのか?ああ!？」

「ひ、ひい…」

「弱い犬ほどよく吠えるとはよく言ったもんだなア三下のフォスターさんよオ!!」

「ガフッ…！」

未来が脇腹に蹴りを入れるとフォスターのまもっていた鎧が砕けフォスター自身もその場に崩れ落ちる。

「そついやさつきある条件下で怒るって言ってたよな？その条件って…」

行人は意外にまったりとしている紅と舞に問いかける。

「マスターが怒るのは…」

「デメエ、俺のダチにした非礼を死をもって償え。」

「マスターは大切な方が傷つけられたりした時しかお怒りにならないません。」

「」「え？」「」

兄、無読

「よかったじゃん、あんたらもうマスターの中では大事な友達みただよ。」

にははと笑いながら舞は行人たちに言う。

「や、よかったも何も…」

「マスター可愛いけど怒らせるとめっちゃ怖いんだよね。もちろんネタかどうかは見極められるけどさ。」

「アレは怖いなんて簡単な一言でかたずけていいんですか？」

お気楽な舞に佐奈とマリイが話しかける。

「紅といったか。いや、アカの方がいいのか？」

「好きな方で構いませんよ。」

行人は紅の方を見ずに話しかける。

「ああなった未来さんは神父にしか止められないと言っていたがなんでだ？」

「それは私たちもわからないのですが何故か私たちが何をしても止まらないのに雪さんが頭をなでるとすつと収まるのです。」

「ふむ…」

一方…

「ひいつ…」

「なんだよ？その顔は。命乞いすれば助かるとでも思ってたのかよ。」

「

「ひつ…！」

「鬼ごっこか？別に俺は構わないぜ。」

「くっ、来るなっ…！」

「ベキッ…！」

「ぐあぁっ!!」

「ほれほれ逃げて見るよ。追いかけてねえからよ。ま、脚一本砕ける状態でどこまで持つかねえ？ひやははっ。」

未来はフォスターの脚の骨をへし折ったようだ。フォスターの顔は恐怖で真っ青になっており未来の顔は悪魔のように口元を歪ませた不気味な笑いを浮かべている。

「さ、流石にやり過ぎですよ!!これじゃあ死んじゃいますって!!」

「つつても私たちじゃマスター止められないもん。」

「そんな投げやりな、何か方法はあるんじゃないんですか!？」

「残念ながら雪さんをお呼びしない限りにはどうにも…」

「そ、それだったら私たちで止めてみます!!ね、サナさん？」

「は、はい。私たちなら可能性はあるんですから。」

そう言って店の外に行こうとする佐奈とマリイに舞が口を開く。

「護身術とか格闘技やってた？」

「へ?」

「初心者ならやめた方がいいよ。もしだめだった時防御しつかりとれないと最低でも腕一本は持ってかれるから。」

「…」

佐奈とマリイはその場で硬直する。

「な、何かの冗談ですよね。」

「だったらいいねえ…」

「えっ…」

「まあ、フォスターさまあないな。にひひっ。」

「舞ちゃん。いい加減笑ってられる状況じゃないよ。」

「分かってる。でも私たちは格闘技とかの経験ないしどっちにしろ止められない。かすかな可能性に欠けてダメだったらこの子たちに

も被害は出る。何をするにしろリスクが高すぎて動けない。でしょ？」

「一応雪さんに連絡はしたけど来れないって…」

「だったら余計ヘタには動けないっしょ。」

紅と舞は声をワントーン下げて話し始める。そんな中まるで空気を読まないある男がのんびりと口を開く。

「んじゃ、俺行くわ。」

「「「はい？」「」「」

「いや、だから俺が未来さん止めてくる。」

「「「はあ！？」「」「」

「ちょ、あんちゃん本気！？」

「ここで冗談だったら誰か笑うか？」

「んにゃ、そうなんだけどさあ…あんちゃん人の話聞いてた？」

「それなりに。」

「じゃ、じゃあなんでですか！？」

「そうですよ兄さん!!」

佐奈とマリイが止める中行人は再び口を開く。

「いや、なんか行ける気がするから。それに未来さんは俺等のために怒ってくれてるんだろ？ だったら俺が止めに行かなきゃダメだろ。」

兄、挑戦

「……」

行人の軽い調子に佐奈、マリイ、舞が固まる中…

「分かりました。それではお願いしてもいいですか？」
紅が行人をまつすぐに見据えて問いかける。

「まかせておけ。」

行人は珍しく視線を紅に合わせて力強く言い放つ。

「ちょ、紅本気!？」

舞はあわてた様子で紅に聞き返す。

「本気だよ、どちらにせよここで行人さんに止められるのであればそれ以上のことはないし。」

「でも兄さんが怪我なんかしたら…」

「その点に関してですが私たちの方で補助をさせていただくので攻撃に関しては防げるかと。」

「そうなんですか…」

口ではそういつてもやはり佐奈は不安をぬぐいきれないようである。

「行人さん、私の力で貴方をお守りできるのはせいぜいマスターの攻撃一回分です。二回目以降は手が打てないと思っておいてください」

い。それでもいいですか？」

「こちらならなんもなしに突っ込もうとしてたんだ。一回きっちり守ってくれるならそれだけで十分だ。」

ちなみにこの間紅はずっと行人をまっすぐに見据えているが既に行人は視線をそらしている。

「わかりました。それじゃあ舞ちゃん、お手伝いしてくれる？」

「任せとけ！あんちゃん、生きて帰ってくるんだぞ！！」

「不吉な事言っなよ……」

行人は舞の言葉に苦笑を浮かべながら返す。

「兄さん、大丈夫ですよね？」

「ああ、大丈夫だ。」

次に不安そうな佐奈の頭を軽くなでる。

「け、怪我しないでくださいね。」

「ヤバかったら逃げるから安心しろ。」

そしてマリイの言葉に軽く返しながら再び紅の方を向いた。

「貴方に押しつけるようになってしまっただけで申し訳ありません。」

「気にするなよ。それに止めるのもダチの役目、だろ？」

「クスッ、そう言っていたらと幾分か救われます。」

「なら良かった。」

「御武運を。」

「おう。」

そう言って行人はぶち破られて何もないドアから店の外へと踏み出した。

店の外に出るとどす黒いオーラがより強く感じられるようになり行人は軽く身震いする。

「まずいな…氣に中てられそうだ…氣合入れ直すか。」

そう呟いた行人は遼の手で自分の頬を思いっきり叩いた。

「っ…！」

思い切り叩きすぎたようだ。

「力加減ミスった…でもその分氣合入ったな。」

行人は真剣な面持ちで未来の方へと歩を進める。

「脚が折れててもまだ逃げようとするその根性、見上げたもんだなア。フォスターさんよ…！」

ガッ

「ギヤアアアアアアア…！」

「最早性質の悪いいじめじゃないか？コレ…」

行人は哀れみの瞳でフォスターを見る。

「ほらほら、もっといい声で啼けよ…」

「ひいいっ…！！！」

未来の言葉にフォスターは声にもならない悲鳴を上げる。

「ヤバいな…早めに止めないとあのおっさん死ぬぞ…」
そう呟き行人は駆けるようにして距離を詰め始める。

「で、そろそろ飽きてきたけど謝る気になったか？」

「あ、ああ…」

フォスターはもう言語を発することすら困難になっているようである。

「そうかい、んじゃ…」

未来は満面の笑みを浮かべて悪夢のような言葉を紡いだ。

「死ねっ!!」

バキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!

「!?!」

未来が驚きの声をあげたその先には…

「間にあつたな。おっさんちびつてないよな？」

未来の蹴りを片手で抑えもう片方の手で未来の頭をしつかりとな

でている行人の姿だった。

兄、鎮庄

「な、何！？今の音！！」

「兄さん！！」

「イクトさん！！」

強烈な破壊音に店の前で見守っていた佐奈、マリイ、舞はそれぞれ叫び声を上げる。

「ま、舞さん！！今のって守れているんですか！？」

「も、もしイクトさんに何かあったら…！！」

「そ、そんな事言われたって…私たちだって精一杯やったし…ねえ、紅？」

「クスッ…」

心配そうに慌てふためく3人をよそに紅は軽く笑いをこらえていた。

「ちょ、ちょっと紅さん！何笑ってるんですか！？」

「そ、そうですね！！イクトさんの腕がもし折れていたりしたら…」

「ふふふふっ…」

そしてついに笑いをこらえきれなかったのか紅は口元に手を当てながら笑い始めた。

「紅、何で笑っているの？」

「みんなは何を心配しているの？」

必死に笑いをこらえながら紅が3人に問う。

「「「？」「」」

「ふふふふふっ…」

「こ、ここまで笑ってる紅初めて見た…」

「で、アカさんは何をそんなに笑っているんですか？」

紅は口元にあてていた手を空高くにつきあげて口を開く。

「だ、だって…行人さんがあんなに子供みたいな無邪気な瞳で嬉しそうにこっちを見てるんだもの。お、おかしくなっちゃって…ふふふっ。」

「「「えっ…」」」

紅の言葉に3人がそれぞれ振り返ると…

後について店へと戻って行った。

兄、鉦山

「ごめんなさい…」

戻ってくるなり未来はしゅんとした表情で謝った。

「大丈夫ですよ、マスター。壁に関してはまた大工さんにおねがいしましょう。」

あまり気にしていなさそうな感じで紅が答える。

「で、でもっ…」

「お金も問題要らないですって。私が交渉してタダでやってもらえるようにするんで。」

舞も紅に続きお気楽に返した。

「で、でもっ…」

「マスター？」

それでもまだ食い下がろうとする未来に二人は口をそろえて呼び掛ける。

「ごめんなさい…」

「で、武器。でしたよね。」

「やっと元の話題に戻ってこれたな。」

「ご、ごめん…」

「や、私たちは気にしてないですよ。ね、兄さん？」

「ああ、見てて気分はよかったぞ。途中まで…」

「あう…」

行人の言葉に未来は照れたように少しうつむく。そのしぐさや表情一つ一つが美少女のようであり到底男だとは思わないだろう。

「とりあえず鉦物を探すためのものは渡したよね？」

「はい、先程お借りしました。」

「んー、あれもらっちゃっていいよ。」

「「え？」」

「マスター、正気ですか!？」

「うん、正気だよ。それに本当にそれが必要になるときもいつか来るだろうしね」

「よ、よくわからないですけどとりあえずもらってもいいんですね？」

「うん、全然いいよ。」

未来の軽いノリに行人たちは戸惑いながらもペンダントをマリイがつけた。

「さて、もうこれで渡すものはないかな？」

「そうですねー。」

「マスター、魔術回路は後30分ほどで通ると思います。」

「そっか。でもそこまで強いモンスターもいないだろうしその武器でも十分に戦えると思うよ。」

「そうなんですか？」

「うん、変に道を行き間違えなければ基本的には熊とかぐらいしか出てこないだろうし。」

未来の助言に3人は安堵の表情を漏らす。

「それじゃあ行っちゃってらっしゃい。しつかり帰ってきてね。俺たちはその間に防具の方も作っておくから。」

「何から何まで悪いな。」

「困ってる時はお互いに助け合う。それが友達だよ?」

未来の言葉に一同はたがいに笑いあう。

「さてと、それじゃあ長居していても日が暮れちまうだろうしそろそろ行くか。」

「そうですね。」

「それではまた。」

それぞれが挨拶をして武器屋を後にして鉾山へと向かう。

行人たちが去った後…

「マスター、なんであのペンダント渡したんです？」

「そうだね。何でだろうね。」

「マリイさん、ですね？」

「あ、やっぱりばれてたか。」

未来たちは扉跡で話をしていた。

「まったく、雪君はいきなり押し付けるんだもんなあ…性質が悪い
というかなんというか…」

「でもそうでなきゃ旦那じゃないよ？」

「そうなんだけどさあ…」

「でも、旅をさせるのは妙案と思います。」

「そうだね。一か所にずっととどまって捕まっちゃうよりはましな
のかもね。」

「でも、あの子氣がついてないでしょ？」

「だからまだ自由に動いていられるんだよ。」

「マスター…」

「紅ちゃん、舞ちゃん。あの子たちは俺たちの手で絶対に守るよ。」
「Yes sir。」

兄、入山

「なあ…これって鉾山に続く道、なんだよな？」

行人は目の前の光景に大きいため息をつく。

「ええ、一応そのはず、なんですけどね…」

「確か、未来さんはこの道を進めば鉾山にはすぐ入れると…」

佐奈とマリイも同様に目の前の光景をただただ茫然と見据える。

無理もないだろう、三人の目の前に広がるは…

単純に言つと樹海だ。

「「「はあ…」」」

三人は重苦しくため息をついた。

いざ樹海に足を踏み込んでみるとカビっばいような高い湿度の空間が三人を迎え入れる。

「どんよりしてますね…」

「そうだな。」

「生き物の気配がないですね…」

「そうですね…」

佐奈とマリイが話しながら歩いていく中行人が立ち止まり不意に口を開いた。

「いや、いたぞ。」

「本当ですか!」

「よかったです。これで少しは重い気分も軽くなります!」
佐奈とマリイの顔がぱあっと明るくなる。

「や、まあ…いたにはいたな、人間が…」

「人がいるんですか? 地元の猟師さんでしょうか?」

「そうだったら鉱山まで案内してもらいましょうよ。」

「あ、ああ…そうだな。」

齒切れが悪そうに行人は頭を掻く。

「? どうしたんですか?」

「というよりその人はどこにいるんですか?」

「ん? あ、ああ…」

「もしかして見失っちゃったんですか?」

「別に私たちは怒ったりしませんから大丈夫ですよ?」

佐奈とマリイは優しい目で行人を見つめる。しかし行人はバツが悪そうに眼をそむける。

「見失ってないことは見失ってないんだ…」

「えっ、どこにいるんです? 兄さん。」

「え、いや…その…」

「イクトさん、何か齒切れが悪くないですか?」

マリイがうかがうように行人の顔を覗き込む。

「や、まあ。なんというかな…いるんだよ、うん。とりあえずは…」

「何かその言い方だと今もうすぐ近くに感じるような感じじゃないで

すか？」

「や、その通りでものすごく近くにいるんだ……」

「え？兄さん、それってどういことですか？」

「察して、くれはしないか……」

「ええ、まるで察せないなので説明をお願いします。」

「とりあえず目を瞑っていてくれるか？」

「構いませんけど……」

佐奈とマリイが目を閉じて行人の指示を待つ。行人は下の方で何かを漁っている。

暫くして行人が重苦しい表情で二人に告げる。

「目を、開けてくれ……」

「もう、そんなに溜められるときになるじゃないですか。」

そうやって二人が目を開けた瞬間に目の前に合ったのは……

「これが俺の見つけた人、いや、元人だ。」

行人の手にはしゃれこうべ、白骨化した頭骸骨があった。

「き、きゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ
あああああ！……！」

「あ、おい……」

二人は悲鳴を上げながらどこかへと走り去ってしまった。

こうして行人、佐奈、マリイは離ればなれになった。

兄、各々

佐奈、マリイが走り去ってしまった後行人は一人で思案にふけりながら『元』人間の頭を眺めていた。

「はて、何を間違ったのか…」

白骨化した骨をバスケットボールを回す要領で器用に回し始める行人。死者への冒瀉も甚だしいが身元もわからずこのまま風化するだけの骨を見つけ出したのは行人である。ボール回しに飽きたのか行人は木の根もとに骨を置く。そして近くに穴を掘り始める。

「こんなとこでのたれ死んだってことはあんたも鉋山を目指してたのかい？」

行人は物言わぬ骨に語りかける。

「あんたとはちゃんと目を見て話せるのにな。」

行人は自嘲気味に骨に語り続ける。

「わかつてるんだよ。自分で相当無理してるって…そりゃあこんなとこにほっぱり出されれば嫌でも無理しなくちゃならないわかつてる。でもそろそろ限界近いかもしれないな。」

行人は穴を掘り進めながらそんなことを言う。本来人と話したりするのが苦手な行人には精神的限界が近いようだ。

「こうやって童心に帰るような事すると思いのほか落ち着くな。」

泥にまみれた行人の顔は楽しそうにほころんでいた。それはこの世界に来てから初めてとも呼べる行人の笑顔だった。

「こうしているとホントに嫌なこと全部忘れられる。あんたもそう思わないか？」

楽しそうな笑顔を骨に向ける行人。女が見れば卒倒しそうな甘く優しい笑顔を行人はほかでもない頭蓋骨に向けている。それがなん

とも物哀しい。当然のごとく頭蓋骨は何も言葉を返さない。

「人の命って儚いよな…もし、もしあんたが俺みたいに人が苦手で触れ合わないためにここに着て死んだのなら…いや、やめよう。」

そう言って行人は立ち上がる。

「うっしできた…」

そこには頭がい骨がちょうど埋葬できそうな大きさの穴が出来上がっていた。

「ふああ…なんか妙に居心地良くなってきて眠くなってきた…なあ、あんたを埋めるのは少し眠ってからでいいか？」

行人は大きく欠伸をした後骨に語りかける。

「佐奈とマリイに関してはこっちから無暗に探しに行っても逆効果だろうし昼寝ついでにここで待つてるとするか。」

そういうと行人は立ち上がり骨を持ちあげ、近くにあつた大きな木に腰かけた。そして骨を抱き抱えたまま柔らかな日差しにその身を任せ深い眠りへと落ちて行つた。

そのころ佐奈は…

「まったく兄さんは…いくらなんでも趣味が悪すぎます!」

怒りながら樹海を散策中のようだ。

「はあ、おまけにみなさんともはぐれてしまいましたし…」

佐奈は歩くのをやめない。すると…

「きゃ…冷たいですよっ…」

という声が聞こえてくる。

「人の声…行ってみましょう!」

佐奈が声のするほうへと走っていく。すると…

「きゃ…え？サナ…さん？」

「マリィ…さん？」

どうやら佐奈とマリィは合流できたようである。

兄、昼寝

「あ、あの…サナさん…」

「何ですか？マリイさん。さっきのことなら別に気にしてないですよ？」

「気にしてる気にしてない以前に忘れてください！！」

「それはちよつと無理な相談かもしれないですね。」

佐奈の返答にマリイは落ち込んだように肩を落とす。

「別にいいじゃないですか。女同士なんだし。」

「そういう問題じゃありません！！ま、まあ確かに行人さんがいなかったのがせめてもの救いですが…」

「そういえば兄さんはどこにいるんでしょうか？」

「そういえば…実のお兄さんですよ？」

「や、あまりにもさっきの光景が衝撃的すぎて…」

「あー！あー！何も聞こえませんよ！！」

どうやらマリイにとってさっきの光景とやはタブーなようだ。

「なんかこうやってマリイさんで遊んでるのもなかなか楽しいんですがそろそろ本題に戻しましょう。」

「た、楽しいって…ま、まあいいとしましょう。それで本題という…」

マリイの問いかけに佐奈は当然と言わんばかりの表情で口を開く。

「もちろん、兄さんのことです。」

「そうですね。どこにいるんでしょうか？」

「迂闊にウロウロするようなタイプではないのでさっきのところ辺りにいるかと思うんですが…」

「突っ走ってきた拳句に私たちがうるちよろして戻り方がまったくと言っていいほどわかりませんね。」

そう、佐奈とマリイはそれぞれ別方向に走りその辺をうるちついていたところさっきの光景の段階で出くわしたのだ。当然のごとく自

分たちがどちらから来たのか、はたまたどちらに行人がいるのかも完全にわからないのだ。唯一わかるのは…

「そういえばさっきからペンダントが反応しているんです。」

「ああ、鉱山への道を示してくれるっていうあの？」

「はい。さっきから強く反応してるんです。」

「そうなんですか。鉱山が近いのかもしれないですね。」

佐奈はしばらく口元に手を当てて思いついたように口を開く。

「それじゃあ先に鉱山に行っちゃいましょうか。」

「えっ？イクトさんはどうするんですか？」

「無論探します。でも適当に探すより一カ所に拠点を置いて探したほうが効率がいいと思うんです。運良く私たちは目的地である鉱山に行くことができます。だったら先に鉱山へ行って鉱山を拠点に兄さんを探すのが得策だと思いませんか？」

「そ、それもそうかもです！」

「それじゃあ鉱山に向かって…」

「「レッツゴー！！」」

そうやって意気揚々と二人はペンダントの示す道を歩き始めた。

そのころ行人はというと…

「Z Z Z Z…」

優雅に昼寝を決め込んでいた。すると向こうのほうから少女が行

人のほうへと近づいてくる。

「あ、あの…」

「Z Z Z Z…」

「あ、よかったです。眠られていたんですね。」

少女は安堵の表情を浮かべた。おそらく行人が死んだとも思っただろう。

「で、でも…ですね？こんなところで寝ていると…その…風邪をひいてしまいます…それに多少なりともモンスターだって出ます…」

少女はおずおずと行人に語りかける。当然反応はない。

「Z Z Z Z…」

「あ、あの…起きて、ください…」

ゆっさゆっさ

少女は行人の体を揺らして起こそうとする。

「んんっ…」

すると行人がまぶたを開く。

「あ、よかったです。そ、その…こんなところで寝ていると、風邪をひいちゃいます。」

「!？」

目の前に人それも美少女が自分の顔を覗き込んでいたので対人さには女性恐怖症の行人は大きく後ずさりを始めようとするが…

「あ、あのっ…」

ガンッ!!

「っー!!」

「後ろに木の枝が出っ張って、ます…」

兄、理解

「あ、あの…大丈夫ですか？」

そういつて少女はおずおずと行人がぶつけた部分を撫でる。
ビクッ

「あ、ごめんなさい！痛かったですか？」

「いや、痛いわけではないんだが…少し距離が近い。」

少女は数秒ぽかんとした後慌てたように顔を赤くし行人から離れる。

「ご、ごめんなさいっ…」

「すまない。女性は、特に苦手なんだ。」

行人は少女から目を逸らすように行った。

「そ、そうだったんですか。それはすみませんでした。余計なお世話でしたよね…」

「いや、気持ちはいれしかったんだ。ありがとう。」

少女と行人はお互いに会話を失いしばしの間静寂が辺りを包んだ。

「俺は大川行人。あんた…名前は？」

「私ですか？私は松原叶と申します。歳は今年で16になります。よろしく願います。それでは、大川さんと呼びしてもよろしいですか？」

少女、松原叶はぺこりと頭を下げた。

「いや、行人でいいよ。俺も叶さんと呼ばせてもらうから。」

「はい、分かりました。それで行人さんは何故この樹海に？」

「ああ、ちょっと鉱山に用があつてな。」

「鉱山、ですか？」

「そう。かい摘まんで説明するとだな……」

行人はいままであつたことを説明する。妹の佐奈と一緒にこの世界に飛ばされてきた事、いきなりスライムと戦つたこと、教会の神父に自分達が世界の救世主にあたる勇者であると言われたこと、そして武器を作るためにこの樹海に足を運び佐奈達とはぐれてしまったこと。行人の話を叶は終始しつかりと聞いていた。そのせいか行人もいつも以上に饒舌になっていた。

「とまあそういった感じでここであつたた寝をしてたわけだ。」

一通り話し終わつた行人に叶は優しく微笑みかける。

「行人さん。女性、苦手なんじゃありませんでしたか？」

「あつ……」

「相当大変だつたんでしょね。昔私の知り合いの方が言つていたのですが、特に人を恐れているタイプの人は自分の中に辛いものを全部溜め込む悪い癖があるつて。そういう人が何かを吐き出すときは本当に精神がギリギリになっているときだつて。」

「ほう、そういうものなのか……」

「みたいです。」

叶はくすりと笑う。

「それでその人はこうも。もしそういった人がいたら信じてあげると……そうすれば相手もこっちの事を信じ苦手意識も減つてくると。」

そう言つて叶は行人の手を取りしつかりと握る。

「私は貴方と会つて間もないですがせっかく出会つたのですから貴

方と親しくなりたいと思っています。行人さんはまだ私の事を恐れているかも知れません。それでもいつか行人さんが私に心を許して仲良くなれるといつまでも信じています。だから、少しずつでも私の事を信じてみてくれませんか？」

行人は叶の真つすぐな瞳から視線を反らさずに叶の言葉を受け止めて一呼吸置き口を開く。

「あんたがいつまでも信じてくれるのであれば…それに答えなくちやな。それに手をずっと握られて話されたらあんたって人が少しずつわかってきたし恐怖心はほとんど残ってないよ。」

叶は行人の言葉に満足そうに微笑み慌てて握っていた手を離す。

「ご、ごめんなさい！手、ずっと握ったままでしたね。」

「いや、別に構わないぞ。」

「そうですか。それじゃあここには日も暮れてしまつかもしれないのでそろそろ行きましょう。」

「行くってどこに？」

「決まっているじゃありませんか、妹さん達を捜しにです。」

「そうだな。しかしあんたはどうして来てくれるんだ？」

「それについても説明したいところなんです…」

叶は臨戦体勢に入り目の前に照準をあわせる。そして行人に告げる。

「まず目の前のソレを何とかしないといけませんね。」

兄、初陣

「グリーズリーか？」

「普通の熊さんであればどれだけ容易だったかはわかりますよね？」
「まあ、体長が10mくらいありそうな熊なんて早々出会えないよな……」

「それにあそこ、見てください。」
叶の指差す先には……

「猪か？ほとんど原型を留めていない様だが……」

「はい。あれも体長3mはあるラージボアと呼ばれるとても凶暴な肉食の猛獣なんです。」

「骨もろくに残っていないな……」

「多分あの熊に全て持って行かれたのでしょう。」

熊は行人達のほうを息を荒げたまま睨み付けるように見ている。

「次のターゲットは俺達ってことか……」

「そうなりますね。行人さん、なにか武器はありますか？」

「ああ、一応はある。」

そういうと行人は未来に貸してもらった武器の入っている袋を手に取り、剣を抜き出す。

「あんた、武器は？」

くまでそのアシストです。」

叶の言葉に行人は軽く頷き答える。

「あんたがそう言うなら信じる。」

この答えに叶は満面の笑みで頷いた。

「はいっ、ありがとうございます。」

行人と叶えは横に並ぶようにして立つ。

「では私が突っ込むのでその隙に回っていただけますか？」

「あんた武器弓なんじゃ……」

「大丈夫です。それじゃあ行きますよ。」

叶は駆け出し弓を中央から二つに引き離す。すると弓の形状から双剣のそれに変わる。

片方の剣を振り上げ、大きく身体を一回転させもう一方の剣で熊に襲い掛かる。しかしその両撃は熊の両腕に受け止められていた。

「なかなかどうして固いですねっ……」

叶は額に小さな汗の玉を浮かべ、苦虫をかみつぶしたような表情で呟く。

叶が抑えている間に行人は大きく迂回して熊の背後に回る。そして叶にサインを送る。

「間一髪ですね。」

叶は受け止めていた双方の剣を下ろす。熊はその隙を逃さず叶に一撃を振り下ろす。

ア!!」

熊は行人の剣に真っ二つに切り裂かれそのまま消滅した。

兄、気付

「お見事です。」

「あんたのおかげだよ。」

行人と叶は拳を軽くぶつける。

「そういえば、跡形も無く消えたって事はあの熊普通の熊じゃなかったのか？」

「多分魔獣ですね。元々大型だった熊を魔法で増強して操作するこ
とでモンスターに仕立て上げたのだとおもいます。」

「ということはほぼ意図的に俺達を狙ったと？」

「そうですね。たぶん三大国のどこかが実行したのかと思います。
三大国とはリミドア、アペンド、グロリアの三つの国の事をさし
ている。しかし何故行人たちは狙われたのだろうか。行人も疑問に
思ったのか叶に問い掛ける。

「でもどうして狙われたのか……」

「それは流石に私にも……行人さん達が最後の、勇者の駒だと知って
いるのは行人さん、妹さん、シスターさん、神父さん、武器屋さん
と私だけですよね？」

「そうなるな。誰か口外しているとは思えないし謎だな。」

「行人さん、あんまり不確定事項で悩んでいても何も事態は好転し
ませんよ。」

叶は切り替えるようにふんわりとした笑顔で行人に話しかける。

「そうだな。それじゃあ行くか。」

「はい。」

行人と叶は足を進めはじめた。

「それで、まだお話していませんでしたよね？」

「何をだ？」

樹海を進む途中叶が不意に口を開いた。

「私が貴方についてきた理由です。」

「ああ、そっぴやそうだったな。だが、いまさら説明が必要なのか？何はともあれあんたは俺について来てくれる。違うか？」

「間違っではないのですがやっぱり行人さんの今後のことに大きく関わってくる事なので一応お話ししておこうかと。」

「俺の今後？」

行人は首を傾げる。叶は落ち着いた口調で口を開く。

「名前で薄々気がついてるかとおもいますが私もピースの一つです。私もある世界より飛ばされて来ました。役割はナイト。勇者を守る騎士です。もうお分かりですよね？」

「まあ、何となくは理解したがそれにしてもあんたが騎士？」

行人は外見からは余り想像しにくい役割を持つ小柄な少女を見る。

「あ、あの…なにか失礼な事考えていませんか？」

小さな騎士はジト目で行人を睨む。

「いんや、別に。」

行人は少し笑いを堪えつつ返す。

「や、やっぱり変な事考えてますっ！わ、私はもう16ですし好きな人だって…」

そこまで言うとなんかな騎士はみるみる赤くなって俯く。そして消え入るような声で言う。

「あ、あの…いまのは忘れてください…」

「いや、別に恥ずかしがることないんじゃないのか？」

「あううつ…」

叶はしゅるしゅると小さくなっていく。

「で、聞いても良いのか？」

「こ、口外しないと約束してくれるのなら…」

「ああ、約束しよう。俺は口が堅いんだ。」

行人は胸を張って答える。そもそも教えてくれるなら聞きたい程度のスタンスでいる行人は人の秘密や約束を守る性格だ。

「私のいた世界に…異次元からの来訪者の方がいました。その人の事好き…なんです。」

「あんたの世界にも？」

「はい、私のいた世界ではこの世界よりも発展した魔術を持っていた私はそこで新撰組という魔法犯罪を取り締まる警察として過ごしていたんです。異次元からきたその人は遊撃隊の隊長でした。」

叶はぽつぽつと話しはじめる。こことも行人のいた世界とも異なる世界での叶のことや想いを伝えきれぬままとの世界へと戻った男と半年ほど前から連絡がぱったりと途絶えたこと。そして消息を捜していた時にこの世界に飛ばされて来たこと。

そして叶の表情に行人は一つの疑問を覚えた。

（どっかで見たことあるような…）

行人は叶を以前どこかで見たような気がしてならなかった。

（どこだ…？どこで見かけた。）

行人は記憶の糸を手繰り寄せる。

（写真…か？）

行人は一つの可能性を見つけだした。写真、どこかで写真で彼女を見たのではないか。写真だから余り深く覚えてはいないのでないかと。

（じゃあどこだ？）

行人がさらに思案を巡らせていると…

「行人さん、どうかなさいましたか？」

「なあ、あんた写真とか、持っていないか？」

「写真…ですか？一応持っていますけど…見ますか？」

そういつて叶は小さなポーチから枠に入っている写真を行人に渡す。

「ビンゴ…」

叶の示した写真はみんな揉みくちやになりながらも笑顔を浮かべている写真。その中心には少し恥ずかしそうに俯きつつも笑顔を浮

かべる叶と…

集団の中心で楽しそうにポーズをとる哉雅雪…神父の姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9272p/>

兄を勇者にする方法

2011年6月3日05時05分発行